

私のフェンシング人生

中 嶋 英 一



私のフェンシング人生

中嶋英一

私のフェンシング人生



中 嶋 英 一



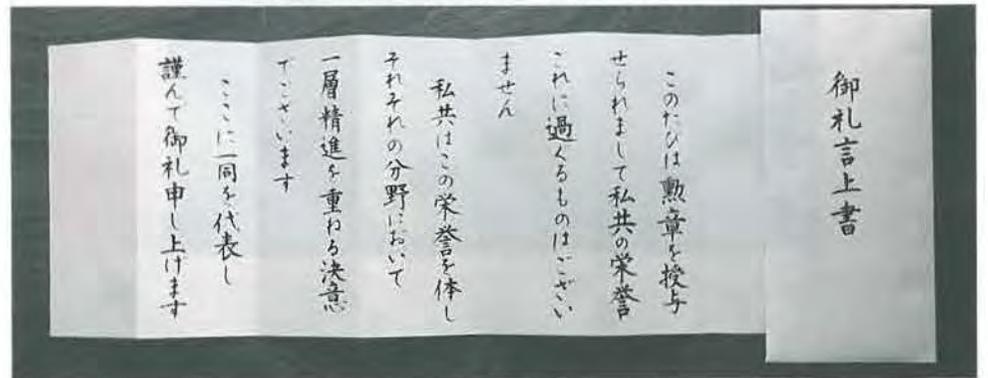
中嶋英一



勲五等雙光旭日章を授与（平成11年11月3日）



叙勲を祝う会の中嶋夫妻



御礼言上書

御礼言上書

このたびは勲章を授与
せられまして私共の榮譽
これに過ぐるものはござい
ません
私共はこの榮譽を体し
それぞれの分野において
一層精進を重ねる決意
でございます
ここに一同を代表し
謹んで御礼申し上げます



昭和37年5月
第十四回国際フェンシング連盟通常総会に
日本代表として出席(スペイン、マドリード)
最後方、左二番目、中嶋代表



右、父 中嶋鉄太郎(中学時代の鹿野鉄)
県下中等学校決勝試合 相手方不詳



マドリード中央広場にて
牧真一氏と中嶋



国際フェンシング連盟(F.I.E.)会議風景
(英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、
スペイン語使用)

(日本) 中嶋
会 長 (イタリア)
理 事 長 (イタリア)



第四回国民体育大会(東京)(昭和24年10月)
フルールレ優勝



フェンシングバッグを肩に中嶋英一
大学の屋上部室隣



鼎ヶ浦高校
全国高校総体
フェンシング競技
団体優勝（二連覇）
千 佐 佐 中 荘
々 々 々 々 々
葉 木 藤 嶋 司
氏 さん さん 氏

千 新 吉 佐
葉 田 野 々
さん さん さん さん

東京オリンピックの日程を説明する
中嶋代表



ＦＩＥの会議を終わって
マドリッドの散歩（昭和37年5月）
牧真一氏と中嶋



第11回東北フェンシング選手権大会
日韓親善フェンシング若柳大会
（昭和48年9月）



アメリカ、ロングビーチ
オリンピックフェンシング競技会場にて
（コンベンションセンター）
大川氏 中嶋
（昭和59年7月）

アジアフェンシング連盟設立総会
（アメリカ、ロングビーチにて）
中嶋、議長をつとめる（昭和59年7月）
森貞子さん通訳（森寅雄夫人）



ヘルシンキオリンピック候補選手

強化合宿

飯坂小学校 (昭和27年3月18日)

堀口氏 (同志社) 進藤氏 (法大) 池内氏 (法大) 高野氏 (明大) 鈴木氏 (同志社) 須郷氏 (中大)

白井氏 (中大) 遠藤氏 (明大) 織田氏 (中大) 牧氏 (慶大) 中嶋氏 (明大)



1952.3.18 飯坂小学校にてオリンピック候補選手



世界選手権の結団式
 団長 中嶋・監督 船水氏・コーチ 中島寛氏
 マネージャー 成田政(秋田)氏 (昭和58年)



パリ・レーシングクラブにて
 名コーチメートル・ベソシュ氏と中嶋
 (昭和37年5月)



トレーニングに出発する
 日本選手団(ウイーン)
 (昭和58年7月)



昭和23年秋季リーグ(戦後初)
 出場メンバー

矢澤氏
 中嶋
 土屋氏
 永松氏
 奈良氏



ロサンゼルス・オリンピック開会式にて
 中嶋 (昭和59年8月)

まえがき

第二次世界大戦が終戦となったのは、もう56年も前のことであります。今では、当時の事が、終戦記念日以外忘れ去られてしまいました。

私達は失望のどん底の中で、森寅雄先生という、すばらしい、フェンシングの師に巡り会う事が出来たのであります。それは、終戦の年の秋で、明大フェンシング部設立前のことであります。

森先生からは、フェンシングの技術以外に、スポーツとは、ただ手足を動かす、勝負を競うだけのものではない。それを通しての人間形成が大切なのである、と教えられました。フェンシングは、礼に始まって礼に終るといふ事を、きびしく指導して頂きました。敗戦という失意の中の私達は、一つの目標をみつける事が出来、この事が、その後の私の人間形成に非常に大きな役割をはたして来たと思います。

私は、フェンシング競技に関するスポーツ新聞の記事・大会のプログラム・成績表等、几帳面にスクラップブックに張りつけ、写真と共に、大切に保管して参りました。その資料を後に開いてみる事も、自分の反省材料となつたし、私の楽しみの一つでもありました。それらの資料を、東北フェンシング連盟の役員会のあとに拙宅を訪ねられた榎さんにお見せしたところ、この資料は是非まとめられた方が宜しいのではとアドバイスを頂きました。

しかし、その後私も病気を患い、家業と本出版の両立は不都合になってしまいました。そこで、榎さんに相談、私にかわつて執筆して頂く事になったのであります。その後、榎さんも突然ご都合が悪くなり延び延びとなつておりました。

不肖私が平成十一年日本フェンシング協会のご推挙により、叙勲の榮に浴することが出来ました。

本年2月には(株)日本フェンシング協会会長就任、あわせて、宮城県フェンシング協会も創立50周年、また今年の10月には国民体育大会も宮城県で開催されます。という記念すべき年にあたりました。私にとりまして、感激一入であります。これ偏に皆様のご援助の賜と深く感謝申し上げます。次第であります。これを機会に皆様への感謝の意味もこめまして、急ぎ本書の発刊に踏み切りました。

本書の内容は、単なる私のフェンシング人生の記録のまとめだけでなく、戦後のわが国フェンシング界の歩みでもあります。後輩の諸君が、フェンシング界の歴史を知る資料として活用して頂ければ幸いです。

若い選手諸君が私共の熱意を受け継ぎ、オリンピックや世界選手権大会に出場し、世界の上位入賞を果して下さる事を深く願うものであります。

本書では、大会記録・新聞・雑誌の記事・写真・私の思い出・関係者の話などが、項目毎に整理されております。また、競技の成績については、読者が試合内容を読みとつて頂けるように、一部そのまま載せてあります。ご活用頂きたいと存じます。

最後になりましたが、本書の上梓のために山形県フェンシング協会の榎昭一氏に、細かい資料の整理・編集・執筆まで総てをお願いしました。お忙しい中ご努力いただきました榎さんのご労苦に対し、心からお礼を申し上げます。また今日までの私を、陰ながら支えてくれた妻、家族、従業員の皆さんどうもありがとうございました。

平成十三年八月吉日

目次

一、私の生い立ち	
1、幼少から小学校時代	1
2、宮城県立築館中学校時代	3
3、明治大学進学	5
二、フェンシングとの出会いと	
森寅雄先生のこと	7
三、明大フェンシング部の復活と	14
わが国フェンシング界の歩み	15
四、フェンシングの技術の向上と	18
普及のために(その1)	
1、フェンサー早川雪洲氏との対談	19
2、外国人フェンサーとの試合	19
3、東京武蔵野フェンシングクラブの誕生	20
4、フェンシングの公開競技会が開かれる	21
。札幌市と東京スポーツセンター	21
。オリンピック強化合宿(飯坂温泉)と	22
福島市の公開模範試合	22
五、私の競技生活	
1、関東学生フェンシングリーグ戦の誕生	25
2、全関東フェンシング選手権大会と	38
全日本フェンシング選手権大会	42
六、フェンシングの技術の向上と	
普及のために(その2)	
1、宮城県フェンシング協会の設立と	43
国民体育大会	53
2、東北フェンシング連盟の結成と	
日韓親善大会	53
七、中嶋英一のフェンシング人生の足跡	57
八、東北フェンシング界の育ての親	68
中嶋英一氏へのお祝いと感謝の言葉	69
あとがき	83

一、私の生い立ち

1、幼少から小学校時代

私は、昭和2年1月13日、父中嶋鉄太郎（旧姓、鹿野）、母きねの長男として、宮城県栗原郡若柳町字川北新町二八番地（現在地）に生まれました。

私の生れた若柳町は、宮城県仙北平野の西部にあたり、金成平野（地元では金成耕土と呼ばれる）に含まれます。耕土というのは、一説によると広土と綴り、広大な平坦地という意味だそうで、平野と同義であると言われております。従って平坦な沖積地ですので、水害の常習地でもありません。上流地に花山ダムが完成してからは、水害はなくなりました。

若柳は肥沃な沖積地の中にありましたので「本石米」の産地として知られ、金成平野での集散地ともなっております。明治の中期

頃、近江蚊帳が入って来るまでは、若柳蚊帳の産地としても有名でした。

明治22年（一八八九）町制をしいた若柳町は、昭和29年12月1日、周辺の有賀、大岡、畑岡の三村と合併、今日に至り、人口約一五、〇〇〇人の町であります。

交通の便は良い方とは言えません。細倉鉱山の鉱石運搬のために、JR東北本線石越駅まで敷設した、私鉄の栗原電鉄と自動車だけでした。私の子供時代は自転車か徒歩で行くほか手段はありませんでした。この栗原電鉄も平成5年（一九九三）、宮城県と沿線の石越、若柳、栗駒、鶯沢、金成の五町などが出資する、第三セクターとなり、走る車も電車からディーゼルカーにかわりました。

母の話によると、私は学校に入る前からずいぶん暴れん坊であつたらしく、常に親に心配をかけていたようです。父は、そのような私をみていたためだったでしょうか、近くの天真閣という、大日本香取神刀流の町道場に連れていき、すぐ入門させられてしまいまし

た。その時、すぐ、剣道の切り返しをやらされた事を鮮明に覚えております。先生は確か渡辺先生と言われる方で、長い髭を生やしたお爺さん先生で、髭の間の小さい口からの一喝が、非常に重く、一度の号令で、全員ピリッとした態度をとらなければならぬような、怖い先生でした。入門している生徒は、十数名いたかどうかはつきりしません。後に柔道家の先輩にお聞きしましたら、先生は、柔道と剣道を主として教えられ、奥様が薙刀を教えておられたということでした。



大日本香取神刀流修了証書
(昭和10年)

この道場で私は、昭和10年1月、修了証書と七級を頂いております。ちなみに天眞閣聖場主は須賀澤蔵之助といつて、神州体育奨励会長、そして天眞閣聖場委員長は大日本武徳会剣道二段、川嶋榮之助さんであったようです。割烹「はさま」のご主人川嶋さんが道場主であつたろうと思います。

私の父、鉄太郎は、中学時代に剣道の選手として活躍、「鹿野鉄」の偉名が、他校まで鳴りひびいていたそうで、かなりの使い手であつたと、父の旧友の方より聞いた事があります。父は、私の暴れん坊を直すためだったのか、体の弱かつた私を健康な子供にしたかったのか、又、剣道の選手として活躍させたかったのか、直接聞いた事がなかつたので、今ではわかりませんが、いずれにしても、私の事をおもつての事だつたことは確かで、今でも感謝しております。

私は、小学校時代には、とにかく走る事が好きでした。少しオーバーに表現すれば、御飯を食べるよりも好きでした。体操のある日

はうれしくて仕方ありませんでした。一年

中の学校行事で、一番好きなイベントは運動会でありました。三年生までは、百米競走は負け知らずでありました。四年生になって、分校より編入して来た者の中に、足の速い者があり、私との接戦が続きました。学年別リレーの選手に選ばれるのが非常に困難になつて参りました。しかし、勝つためには何か方法があるはずと、子供心に考え、当時、若柳

小学校で行われた、宮城県中等学校陸上競技大会を見に行きました。見ておりますと、勝つ選手は、みんなスタートが早く、フォームがきれいであるという事が、強烈に頭の中に入つたのであります。しかし、教わる人のいなかつた私は、自分で考え研究するのみでありました。自分なりに解決した事は、先ずスタートは、ピストルの「ドン」と同時に走り出すことと、「ヨイイ」の時に、すぐ飛び出せる体勢を整えている事を身につけたようでありました。五年と六年生で学級と学年のリレーの代表に選ばれました。先生から、「中嶋」

「お前はスタートがよいな」と言われ、第一走者になる。褒められるから益々頑張る、トップで第二走者にバトンタッチする、こうして勝抜き、自信を深めていきました。他校の運動会に出場して、優勝旗を土産に持ち帰ることも度々でありました。栗原郡の郡大会の学校対抗四百米リレーで、準優勝を勝ちとつた記憶は今でも鮮明であります。

2、宮城県立築館中学校時代

私は、昭和14年、戦時色の濃くなつた4月に、宮城県立築館中学校に入学しました。体はやせ型で、あまり丈夫な方ではなかつたが、走る事は、子供の頃から好きで、築館中学に入学したら、陸上競技部に入学し、思い切り走つてみたいと思つておりました。

入学して間もない頃、校庭で陸上競技部の練習を見ていたところ、「君は、毎日見に来てゐるが、走るのが好きか？」と主将らしい人（小野寺さん？）から声をかけられた。「うん」と頷くと、「一緒に走ってみろ」と言われ、先

輩部員と走った。百米二回と二百米二回であったと思いますが、何と私が、二、三年の先輩部員に勝ったのであります。私は、その後、いい気になっていたのですが、私に勝たせてくれたのは、私を入れるための入部作戦であったという事を知ったのは、はるか後の事でした。



築館中学校200m走第1位賞状

上級生は中・長距離の方が多く、同級生は二人が短距離、一人が長距離でした。そんな事があって、すんなりと大好きな陸上競技部に入部し、私のスポーツ人生が始まったので

あります。

私は短距離走のほか、物干し竿で遊ぶ、棒高跳びにも意欲的に取り組みました。陸上競技部の部長先生であった、片寄政直先生は、夕闇迫る頃まで指導なされてはおりませんが、その指導には限界がありました（専門は柔道であったようです）。私の種目に関して言えば、よいコーチに恵まれませんでした。従って、先輩の物真似が研究材料であり、棒高跳びは、本をみたり、ベルリンオリンピックの記録映画「民族の祭典」の大江選手の跳び方を真似る事しか方法がありませんでした。今考えてみると、極めて危険な練習であったと思います。私のライバルは、千葉文雄君でした。彼は後に、走高跳びに転じた選手で、後に教職の道にすすまれ、若き子供達の指導にあたられました。奇遇にも、十数年前に私と同じ心臓病を患い、バイパス手術をやった病氣仲間ともなったのであります。

昭和16年〜17年となりますと、戦雲急を告げ、大会等も開催されず、学校対抗試合程度

でありました。当然の事ながら、技術の向上、記録更新などは縁の遠いものでした。只、相手校の選手に勝つ事のみでありました。

上級学年になりますと、出征兵の留守宅の農作業の手伝いに行く勤労奉仕と、軍事教練、更には、精神修養の訓練に明け暮れる日々でした。一番伸び盛りの頃に、大好きなスポーツが出来ずに過ぎたのであります。しかし、気力、体力の面では、徐々に力がつき、その時代に即応した精神力を持つ事が出来たことには満足感がありました。

私は、若柳の自宅から、築館中学までの砂利道を自転車を通いました。晴れた日ばかりではありません、雨の日、向い風の日もありました。だが、追い風の日には快適で、二十九分で帰った事もありました。陸上部の練習とともに、中学時代の懐かしい思い出であります。これらの積み重ねが、知らず知らず、足の鍛練になっていったのではないかと思います。ある時には、自転車の競輪選手にもなれるのではないかと思つた事もありました。

剣道は正課のみでしたが、子供時代に道場に通つた事もありましたので、剣道部の練習に参加させてもらう事もありました。ある意味では、自由な部活動であったと思います。剣道の試合の想い出は、一年生から五年生まで出場する紅白試合に出場した事です。私は四年生でしたが、得意の「出小手」を決めて、五年生を三人抜いた事であり、これも、フェンシングの道に入る事になった一因でもあるかと思ひます。

こうして五年生の八月、私は剣道二段に昇段することになりました。

3、明治大学進学

昭和19年3月、築館中学校を卒業した私は、東京の大学に進学したいと思ひ、父に相談したところ、卒業後は家に戻り家業（呉服商）を継ぐ事を約束するならば、という条件で許してくれました。そして、昭和19年4月、上京、明治大学専門部法科に入学することになったのであります。

入学式も終り、五月頃であったと思います。私は陸上競技部に入部しようと思つて部室を訪ねたのであります。在室しておられた先輩部員は、「先輩方は、学徒動員で出征し、現在部員は三名だけで、休部状態である。入部は取り止めにした方がよいのではないか」との事でした。仕方がないので、そのまま帰つて来たのであります。この昭和19年は、戦争も熾烈となり、6月19日、海戦史上空前の規模の「マリアナ沖海戦」が始まつた年でもあります。

そして、とうとう10月には、各大学の体育部は解散することになったのであります。私が二年生となつた、昭和20年の8月、学徒動員中に終戦を迎え、大学に戻ることになつたのであります。



映画「華やかなる決闘」より
三村秀子（高峰）、山内明
（明大選手のユニホーム着用）
昭和24年4月撮影

二、フェンシングとの出会い

と森寅雄先生のこと

私がフェンシングなるものに出合つたのは、部の設立前に、友人土屋武君に誘われて、森寅雄先生に巡り合つた事が最初であります。昭和20年の秋の事でした。

森寅雄先生は、旧姓は野間寅雄と言つて、講談社社長宅の野間道場で鳴らした剣豪の方

森寅雄先生練習風景（渡米記念）

（中大屋上コートにて）



であります。戦前アメリカでフェンシングを習得、太平洋選手権、全米選手権の保持者でした。私は人格識見が豊かで、少しの隙もない、心技体一体の先生に魅せられてしまいました。先生は、当時桐生にお住まいでしたから、桐生にお訪ねして、庭先での指導を受けるといふ状況でした。練習が終つて先生と一緒に庭先で頂いたさつま芋の味は忘れる事の出来ないものでした。あのさつま芋も、食糧事情のきびしい時でありましたので、ご自宅の分から、特に私共に食べさせてくれたものだろうと思います。私は、買出し電車で有名な東武線で週三回通つて、ご指導を受けました。私とフェンシングとの出会いは、斯くの如くして始まつたのであります。

「足が良いし、反射神経も中々良いぞ」などと褒められると、一層練習に身がはいり、フットワークで相手との間合を自分のものにする基本、それに相手の突いて来た剣を払つて突き返す。これらの基本の技を、忠実に、一層力を入れて練習するようになりました。

中学時代に鍛えた陸上部での足、正課で学んだ剣道の腕、通学することによって自然にえたねばりなど、洋の東西を問わず、剣の道は相通じるものがあるのだという事を学び、それが生かされたのであります。森寅雄先生は、私にとりまして、人生の良き先輩、良き師として忘れる事の出来ない偉大な先生であります。しかし、先生は38年ほど前になりますが、アメリカで経営されておりました剣道の道場で、指導なされている最中に帰らぬ人となつたのであります。実に惜しい方を失ってしまいました。心から御冥福をお祈り申し上げます。

森寅雄先生の事については、私が当時の報知新聞、日刊スポーツ、夕刊毎日、スポーツ毎日等に掲載された記事に関して切抜き、スクラップブックに貼付しておりましたので、それらを綴りあわせ、先生の偉大さを偲びたいと思います。

昭和27年6月9日の報知新聞では「全米フェンシングの話題、森寅雄」の見出しで、五

段にわたって掲載しております。「野間家で剣道に励む。寅雄は野間講談社社長の妹の次男に生れた。小学校三年の時桐生市の実家から野間家に引きとられ、四つ年上の従兄、恒と一緒に邸内の道場で朝晩稽古に励み合った。府立四中に入ってから、剣道ばかりやっていたので危うく落第しそうになり、巣鴨中学に転校、四年で四段の腕前となった。昭和3年、第一回全国中学剣道大会で、彼は主将として、強敵高松中学を破って全国制覇を遂げた。中学卒業後、当時、野間清治が経営していた報知新聞に入社、千葉周作の高弟、森要蔵の血統をもつ母方の養子となった。」と書いている。将来有望な剣豪（六段）森寅雄が、戦前の華やかな剣道界から、何故に渡来し、フェンシングの道を選んだのであろうか、これについても報知新聞は次の様に報じている。「従兄の野間恒に敗る、昭和9年4月、日本一の剣士を競う天覧試合の最終予選として、東京府立一中道場で、東京府選抜の決勝試合が行われた。野間恒対森寅雄という、日本を

代表する両剣士の顔合せである。恒は努力の剣、寅雄のそれは天才的なものだった。寅雄の実力が恒を上回っていることは、万人の認めるところだが、従兄恒と相対した寅雄は、何故かいつもの闘志を見せなかった。

その前夜、恒から「決勝では決して兄と勝負をやるのではないか」といわれた事が、彼の脳裏に去来して、なぜか闘魂が燃えて来ないのだ、試合は寅雄の出鼻を突いた恒が「胴」を二本とり、たった二分間であっけない勝負に終わった。恒は出版王、野間清治氏の一人息子、寅雄は甥にあたる。その頃、「野間の二剣士」とうたわれた両者のうち、勝ったものが必ず全国制覇するだろうという下馬評が、ぴたりたり、天覧試合では野間恒が優勝を遂げた、恒は寅雄がかつて楽勝した逆二刀流の猛者、藤本四段（四国代表）と決勝であたり、苦戦のあげく勝つたのである。この事が世評を生んで「寅雄の負けたのは、やはり野間家への義理だったのだ」といわれ、それが彼の

耳に響くたびに悩みもだえた。寅雄が恒に敗れたことは、いつまでも剣道界の話題に上っていた。

寅雄は恒と、これまで何回か対戦したが、ロサンゼルス・体育クラブ屋上サークル練習の森寅雄氏

(報知新聞 昭和27年6月9日)



勝ったことがなく、従兄には、どうしても勝てないという先入観があった事が、恒に敗れた真相のようである。これ以来、彼は次第に剣道の中に精神的な行詰りと空白を感じるようになっていった。彼は、それを打ち消す手段を外国に求めて行ったのである。

昭和12年1月、24歳で横浜港から、逃げるようにしてアメリカに渡り、南カリフォルニア大学に入学した。半年にわたりフェンシングを専攻するうち、彼はすっかりフェンシングの虜になってしまった。剣の天才は急速な進歩をみせ、翌年4月行われた南カリフォルニア州選手権大会では、サーブルの個人優勝、ロサンゼルス体育倶楽部の主将となつて、団体でも優勝し金メダルを獲得、ついで太平洋沿岸選手権大会でもサーブルの選手権を握ってしまった。(海野)

第二次世界大戦でアメリカから帰国した森寅雄氏は、桐生市新宿通りに自宅を持ち、前橋市の群馬電気工事株式会社取締役会長を務め、一方、戦後復興した日本フェンシング協

会の副会長、更に群馬に進駐していた米軍の第99、第21、第61部隊のフェンシング教師となつて、1938、1939年全米サーブル選手権保持者としての貫禄と技術をもって、米軍将兵を指導していたのであります。

昭和24年1月には戦後初のスポーツ代表として米国に派遣されることになった、陸上競技の織田幹雄氏(朝日新聞運動部長)に森寅雄氏も同行する事になった旨、同氏の口から明らかとなった。同氏の夫人はアメリカ人であり、現在子供と共にアメリカに在るといふ関係もあり、フェンシングの教授法とオリンピック出場チーム編成の目安をたてるため、フェンサー17万人を擁する全米フェンシング界の現状をつぶさに視察するために、約2年にわたつて渡米修業することになったのであります。又、同氏はフェンシングのほか近代五種競技の視察も行うことになり、織田氏の手続と準備が出来次第出発することになった。出発にあたり、森寅雄氏は次の様に語っている。「妻と子供がいますので米国に行く事



森先生一石橋氏(中大)

にしました。生れかわつたつもりで剣の修業をつんでくるつもりです。オリンピックの時、は自ら陣頭に立つて行く覚悟ですから、みっちりやってきました。オリンピックのはじまる一年前までに帰る予定です。こうして旅立って行ったのであります。

渡米後の彼の活躍について、夕刊毎日(橋田通信員)及び、スポーツ毎日、日刊スポー

ツは次の様に書いている。昭和25年2月7日の夕刊毎日新聞の記事では、「南カリフォルニア選手権を獲得、フェンシングの森氏」(ロサンゼルスにて、橋田通信員発)、日本フェンシング協会より、米フェンシング研究のため、昨年12月渡米し、目下ロサンゼルス体育クラブのジャン・ヘレマンコーチの下に修業を続けている故野間清治氏の甥、日本フェンシング協会副会長森寅雄氏は、1月27日、パサデナ市YMCAで開かれた米国アマチュア・フェンサーズ連盟、南カリフォルニア支部のシニア・セーバー(サーブル)選手権大会に出場、全勝という好成績で南カリフォルニア選手権を獲得、来る4月カリフォルニア大会に出場、さらに6月の全米大会出場候補として期待されている。同大会の成績は出場者9名で、森氏は8名の米人選手を、5対3、5対2または5対1という圧倒的スコアでいずれも快勝している。試合後、森氏は次の如く語った。米国のフェンシングは非常に盛んになつて来ている。ことにヨーロッパから新しい

選手が続々と入り込んで来ている。試合には必ずアーギュメントがあるものであるが、この大会ではきれいに勝つことができ、それがなかった。全勝ということも珍しかった。日本フェンシングの現在進んでいる方向は決して間違いないと思う、と報じている。

また、彼が渡米の前日まで指導していた中央大学フェンシング部にあてた手紙には、試合の状況や、アメリカのフェンシング試合の階級制などについて伝えて来ております。まず、階級制の試合については、日本の剣道のように、進級試合で良い成績を収めた者が、何人も同時に進級するのではなくて、ノーピス、ジュニア、インターミディエイト、シニア等と五階級ある中の第一位の者が、一人だけ進級出来るという制度になっているということです。ですから、森さんの10年前の友人が未だにジュニアクラスに止まっているという現実も生れてくるわけでありました。又戦い方については、変化ある細かいテクニクに長じた猛者たちに対して、コンボーズした攻

撃は不利とみたので、シンプル、リポステを第一目標において、その時機を得るために、タイミングとディスタンスに全能力を尽くした結果成功したと自己評価すると共に、彼のとった作戦については、「自分が一番得意とするところですし、他の選手のまだ学び得てない弱点をつく事が出来た」と、彼の弛みない努力の賜と自信をも垣間見ることが出来ます。しかしランクにきびしいアメリカでは、YMC Aの南カリフォルニア選手権大会で全勝し、セーバーの選手権を獲得したものの、森のランクは10年前のものであるから、今直ぐシニアで出場させるのは間違いであると物言いがつき、一クラス下のインターミディエイトの

4月3日の試合に出場しなければならなくなったのであります。しかしこれまた難なく優勝、多くのオリンピック選手を有する、ロサンゼルス最高クラスのフェンサーを悉く撫で斬りにし、アメリカフェンシング界に大センセーションを巻き起したのであります。その結果、いよいよ全米選手権大会への第一関

門である、パシフィック・コースト選手権南カリフォルニア選抜試合に、4月1日個人として出場、ゆうゆう代表権を獲得し、同28日の団体試合にL A A Cの主将として出場し、堂々優勝。個人、団体ともにパシフィック・コーストへの出場権を獲得しました(スポーツ毎日、昭和25年5月20日)。又、彼は黒田スポーツ毎日の編集長に、次のような書簡を寄せている。「おかげ様で、漸く南カリフォルニアの個人代表三名の中にも入ることができ、また、チームの南加代表にもなれ、両方ともパシフィックに出場できるということは、ほくとしては最上の幸運でした。

パシフィックや全米を極く簡単に考える人がおりますが、各クラスの盛り沢山の試合を経て、やっと南カリフォルニア代表になれるのですから、考えてみるとよくやって来た、われながら感心させられます。フェンシングの試合が、デリケートで難

しい上に、ただ一人の日本人として戦うことは有形無形の率の悪さを感じられ、しみじみ試合の難しさを味わいました」と本音を吐露しているのであります。敗戦国の日本人がたった一人で戦い、勝ち抜いて来たわけですから、その目に見えない苦労は並大抵のものではなかったと思えます。

パシフィック・コーストフェンシング選手権大会は5月19日から三日間開かれました。その模様について、前記スポーツ毎日の黒田編集長に、次の様に報告しております。L A A Cチーム選手として出場した、セーバー団



第3回国民体育大会
福岡平和台競技場
牧真一氏、森寅雄氏

体戦では、3戦3勝。インターミディエイト個人セーバー戦では軽く優勝、最終日の全米大会出場権をかけた、オープン・セーバー戦は僅少の差で3位となったが、個人、団体と二つの太平洋選手権を獲得、個人、団体とも全米大会の参加資格を得たのであります。三位となった、オープン・セーバー戦については、彼は、次の様に伝えております。「最終日のオープン選手権が、全米大会選抜を兼ねた試合です。既に二つの選手権を取って気をよくした訳でも、油断した訳でもなかったのですが、第一日に勝った選手に今度はやられてしまいました。ジャンプラ氏との対戦が事実上の決勝となり、大会随一の大試合となりました。3対3でタイム・アップ、最後の一本を会心のリポステ（きり返し）で決めた心積りでしたが、認められずやられてしまいました。しかし、米国オリンピック委員や、1920年のオリンピック三種目を優勝したナデイ氏らが、この試合を、稀に見る好試合だったと評し、森のカウンター、リポステはかつて見な

い早さと激賞してくれました事は、私にとりまして最大の収穫でありました。

（スポーツ毎日、昭和25年6月10日）



フェンシングの森寅雄選手（ロサンゼルス）

三、明大フェンシング部の復活と わが国フェンシング界の歩み

昭和22年9月、明治大学フェンシング部が先輩方のはげましもあつて復活することが出来ました。私も、フェンシングなるものは、よく解らないままに、森寅雄先生の手解きを受けた事もあつて早速入部することになったのであります。

ここでわが国のフェンシング界の歩みについて触れてみたいと思います。わが国ではサークルの歴史が最も古く、最初の導入は、約四百年以上前に長崎を訪れた西洋人によって紹介されたといひます。明治維新以後は片手軍刀術として、軍隊と警察等で採用されて来ましたが、ただ個人的に、一部の人の間に習得されて来たもので、スポーツとしての組織だった活動はみられなかったのであります。一般の方々に与えた印象も、日本のスポーツ界での新顔の感は免れていなかったと思われ

ます。

昭和11年ベルリン・オリンピックが開かれた年に、次回の昭和15年のオリンピックが東京開催に正式に決まり、オリンピックの主要競技であるフェンシング競技も、主催国の名誉にかけても行わざるを得ない立場となったのであります。協会結成の気運が急速に盛り上がり、直ちに設立のための委員会を結成し、競技の紹介や競技を認識してもらうための啓



昭和27年度納会
岩倉具清先生と明大フェンシング部

蒙活動にも力を注ぐようになったのでありません。

フランス留学中にフェンシングを学んだ、岩倉具清氏は、帰国後、同好の者を募り、指導をはじめたのであります。平沼五郎、三上哲夫、牧真一、佐野雅之の諸氏でありました。そして、昭和10年には、日本フェンシング倶楽部を結成しました。ここで学んだ学生たちは母校に帰ってクラブをつくることとなり、慶応義塾大学、明治大学、法政大学等々にフェンシング倶楽部が誕生することになったのです。部創立の模様を明治大学創立20周年記念誌に「わが部の歩み」として三上哲夫先輩が具体的に書いていますので引用してみよう。



日本フェンシング協会
初代理事長
三上 哲夫氏(明大OB)
(明大記念誌より)

わが明大フェンシング部は、昭和12年4月5日に創立した。創立者は当時明大法学部に籍を置いていた三上哲夫である。三上は中学時代から、数多くの学生運動に道を拓くかたわら、剣道を通してフェンシングの長所を知り、遠くアメリカのカリフォルニア大学で、学業と共に、この新しいスポーツを学んだ。そして昭和12年の春早く、明大にもフェンシング部を組織することに着手し、同僚の福田裕、三田弥兵衛、酒谷修吉、松本政之輔、田崎、加藤らを招集して、英語部々室内にフェンシング部を設けた。その頃、日本の統轄団体としては、大日本アマチュアフェンシング協会があり、既に慶大、法大にも、実際のなフェンシング部が出来ていたため、創立当時の我が部は、外部からも大きな協力を願えたわけであるが、中でも岩倉具清、近藤天の二氏の御助力は忘れてならないことである。

さて、初代部長にフランス語の佐藤教授

をお願いし、マークも創立者三上の愛称にちなんだ「テディーベア(黒い熊)」に決めた我が部は、三上を主体として発足することになった。これと前後して専大、東大にも部が創られた。

わが部がやつと基盤らしきものを整えた頃は福田裕が主将で、それを補佐したのが、赤塚信平、黒沢正澄を中心とするグループであった。これに次いで主流を継いだ者は二谷英一である。

この頃のフェンシング競技は、専大、慶大、法大、東大、明大の五大学で行われていたが、勿論我が部は常に上位を占めていた。こうしてフェンシング界が軌道に乗り始めた頃、第二次大戦が激しくなり、フェンシング界は、他の外国スポーツ同様、鳴りをひそめ、協会も自然解散となった。

(明大記念誌より)

かくてフェンシング界は内外の整備も整い、機全く熟した昭和11年10月23日に、日本青年

館で、会長に子爵曾我部祐邦氏を推戴して、日本フェンシング協会発足式が盛大に挙行されたのであります。この協会発足以後フェンシング熱は急速に学生界にひろがり、加盟団体も増加し、さらに昭和13年6月、組織を拡大強化するために関東、関西の協会を新たに設けることになりました。国際フェンシング連盟には、昭和13年3月、正式に加入が許可され、同年5月大日本体育協会への加入も許可されました。全日本選手権大会等の大会や、技術の向上と一般の方々への普及をも目的として、合同練習、講習会等もしばしば催されるようになりました。昭和18年、外来スポーツ排撃の空気が体育界をも包みはじめ、日本フェンシング協会は同年12月には発展的解消をとげることとなりました。

終戦を迎えることになって、出征していたフェンサー達は続々復員して来られた。三上哲夫氏らは、いち早くフェンシング界の復活を図り、連合国最高司令部体育局のグラハム少佐にお願いし、許可を得るや、二瓶俊彦、

平沼五郎、牧真一、佐野雅之、進藤誠、池内一郎、福田裕、鍋島直浩の各氏らと日本橋の三上事務所で相談、(昭和22年8月)昭和23年8月、三上氏の馬術の友人であった森村義行氏を会長に迎え再発足したのであります。名称も「日本フェンシング協会」と改めることになり、日本体育協会への加盟も同年12月に認められ、つづいて昭和26年4月、国際フェンシング連盟への復帰もなつたのであります。役員としては、会長に森村義行、副会長に二瓶俊彦、森寅雄、松葉徳三郎、理事長には三上哲夫の各氏が就任したのであります。

明治大学、慶応義塾大学、早稲田大学、新たに中央大学も加え、関東学生連盟を結成、更に関西の大学とも合議の上、全日本学生連盟を結成し、協会傘下の学生団体が生れることになつたのであります。昭和22年に第一回大会が開催され、昭和26年からは、全日本大学選手権大会と東西対抗戦も行われるようになったのであります。

第8回国体(松山大会)開会式
宮城県選手団入場 旗手 中嶋選手



四、フェンシングの技術の 向上と普及のために

(その1)

1、フェンサー早川雪洲氏との 対談

当時の私達は、フェンシングの技術を求めて、教えて下さる方がいたら、どこにでも訪ね教えを請うた。その二、三の例について、年次は、あとの話になりますが書き加えておきましょう。

私が大学を卒業(昭和25年3月)してからの話になりますが、6月にスポーツ日本の企画で、早川雪洲氏との対談がありました。

アメリカ、ハリウッドの映画スター、早川雪洲氏が十三年振りに帰国されたのであります。早川雪洲氏は日本の生んだ世界的名優であるという事は知っていても、本場フランスで鳴らした名フェンサーであることは知られ

ていなかったと思います。スポーツ日本では、私の同期である飯田雄久君(1949年、サーブル全日本選手権保持者)と奈良泰夫君(1949年、フルール学生選手権保持者)と早川雪洲氏との対談を企画され、スポーツニッポン、昭和25年6月20日に、その対談内容として①早川氏がフェンシングを始めた時の事、②フランス・フェンシング界の事、③日本人にとってフェンシングは有望種目である事、④フェンシングクラブの必要性の事等々の内容について紹介されたのであります。

2、外国人フェンサーとの試合

中央大学の例になりますが、こんなこともありました。

昭和26年4月14日、日刊スポーツの記事によると、朝鮮動乱の戦線に国連軍の一人として参加、不幸にして足部に負傷して日本で療養中の、ギリシャ国連軍カラマザキス・ラン陸軍大尉はギリシャのサーベルチャンピオンの肩書を持っておりサーブルの感触を忘れ得



ギリシャ国連軍カラマザキス・ラン大尉と
中大フェンシング部員

(日刊スポーツ 昭和26年4月14日)

ず、13日午後3時、飄然と中大のフェンシング道場を訪れ、同大学の部員を相手に妙技を見せたのであります。

また、昭和26年8月川崎港にカナダの貨物船、オーシャン・サイド号が入港した時、その船の司厨長であったローランド・アッセリン氏は、カナダフェンシング界の第一人者で、当年度のカナダのフルーレ選手権を持ち、ロンドンオリンピックにも出場した一流剣士で、日本フェンシング協会に、他流試合を申し込んで来たのであります。そこで日本フェンシン

グ協会では、8月2日、午後1時から、神田YMCAにアッセリン氏を迎え、協会としては戦後初めての国際試合が行われたのであります。

3、東京武蔵野フェンシング クラブの誕生

私達は、学生時代、全力でフェンシングにとりくみ、懸命に練習にはげみました。試合の結果、とりくみ等については、後に関東学生リーグ戦、全日本選手権、国民体育大会等、私の競技生活の項でまとめるが、常に頭の中にあつた事は、フェンシングというものが一般の方々に容易に理解してもらえないという事でありました。理解してもらうためには、①フェンシングを公開し競技をみてもらい理解してもらう事。②フェンシングクラブを設け、初心者指導・経験者の継続練習の場を提供したいという事。③初心者のための講習会を開き同好の士をふやす事などの問題を解決しなければならぬと思っております。

私の同期の飯田雄久君は、大学を卒業して6月、早川雪洲氏との対談でも問題になったフェンシングのクラブについて実行にうつし、8月には早速創設に踏切ることになりました。彼の行動力には頭が下がります。

スポーツ日本(昭和25年8月15日)の記事によると、日本フェンシング協会副会長森寅雄氏の渡米以来活況を呈して来た日本フェンシング界も、社会人に開放された練習場がないため、一般的には容易に普及していませんでした。セーバー(サーブル)全日本選手権者で、森寅雄氏の直弟子である飯田雄久氏は、社会人を対象にした東京武蔵野フェンシングクラブを創設し、専門練習場を板橋区板橋町五丁目建設中であつたが、いよいよ来る9月4日開場式の運びとなつたのであります。この練習場は清瀬体協専務理事、牛田板橋区長、北原体育会長らの積極的な支援によつて生まれたもので、将来はフェンシングを中心に各種スポーツを包含した総合練習場建設への構想も樹てられているのであります。

飯田雄久氏は、「フェンシングは健康、美容に最適のスポーツであるばかりでなく、品性の向上にも資するものであることを、老若男女を問わず、一人でも多く知ってもらいたいと考えて計画を起しました。正しい楽しい練習を積んでヘルシンキを目指したいと思えます。」と結んでいる。このクラブを契機に、いくつかのクラブが誕生することになったのであります。

4、フェンシングの公開競技会が 開かれる

。札幌市と東京スポーツセンター
私共は、学生最後の夏、昭和24年8月30日、フェンシング競技の普及のために、札幌フェンシング協会の招きで、北海道に渡り、札幌市大通りフロアコートで公開試合と共にフェンシング競技の解説付きの試合を約一時間にわたって行った。アメリカ札幌民事部のニプロ教育課長も顔を見せ、米国におけるフェンシング競技についての懇切な説明もあつた。



東洋一のスポーツ殿堂
東京スポーツセンター(東京都港区芝大門)
日刊スポーツより

私共、公開競技に参加した、土屋、中嶋、奈良、飯田等六名にとって、盛況のうちに会を開けることが出来たことは、誠に喜ばしい事であり、コートを囲んで熱心に見学されてお



明大レギュラーメンバーに囲まれた
全日本二位の盛林眞子選手

温泉で行われました。私もその中に選ばれ、8日間のきびしい練習に参加したのですが、合宿が終った22日、福島市公会堂において、公開模範試合を行いました。その時の参加は、明大OBの私中嶋と明大の遠藤(福島県郡山市出身)、同じく高野、中大須郷、白井、織田の6選手でありました。地元の新聞・福島民友は、「合宿で鍛えた鮮やかな剣さばきは、観衆を魅了した。一行は同夜、飯坂で納会を行ない、激しかった練習に一応終符を打ったが、中嶋選手は、「飯坂合宿の前に、明大で合

った札幌市民の方々の姿が今でも思い出されるのであります。

また、私は、日本スポーツ株式会社、港区芝大門に建設した、東洋一と誇る東京スポーツセンターの開場記念スポーツ祭にフェンシング競技の選手として出場出来たことも思い出に残るものであります。因みに、公開競技出場選手は、△フルール・土屋武(明大)―神谷正一(立大)・中嶋英一(明大)―白井宗光(中大)・三上和子(東京クラブ)―鈴木君子(鎌倉クラブ)・斎藤保子(鎌倉クラブ)―小林絹子(日大)、△エペ・池内一郎(法政OB)―進藤誠(法政OB)、△サーブル・須郷智(中大)―飯田雄久(明大)・織田毅(中大)―石橋博(中大)・平沼五郎(慶応OB)―三上哲夫(明大OB)の諸氏でありました。

。オリンピック強化合宿(飯坂温泉)と
福島市の公開模範試合

昭和27年3月、ヘルシンキ・オリンピック派遣候補者11名の強化合宿が、福島県の飯坂

宿したので、どうやら本調子になった。みっちり励んでヘルシンキに遠征したい」と語っていた。また池内監督談として、まだ全部本格的なコンディションになっていないようだ。オリンピックの派遣選手は1名となっており、実力伯仲しているので、だれが行くか見当がつかないが、派遣選手をふやしてもらおうよう運動している。さらに選手は、試合について抗議ができない事になっているので、ぜひ監督もつくようにしたいと思っている。」と報じている。この合宿の前9日から、明治大学フェンシング部が郡山で合宿しているので、これらの事は、地元福島県の皆様に多大なる影響を与えた事は否定出来ないと思います。

私は昭和25年3月、明治大学法学部を卒業いたしました。卒業はしたものの、目の前にヘルシンキ・オリンピックを控えているので、フェンシングへの情熱は衰える事はありませんでした。しかし、長男としては、父との約束を反古には出来ず、家業の呉服店の仕事と、フェンシングの練習(普及、コーチも含めて)

という二足の草鞋を履く事を認めてもらいながらの選手生活を続けて行く事を決心したのであります。



第4回国体(東京大会)
昭和24年11月
中嶋個人フルーレ優勝

1949(昭和24)年
関東フェンシング選手権大会
プログラム



中嶋勝つ
中嶋(明大)―沢藤選手(中大・主将)

五、私の競技生活

1、関東学生

フェンシングリーグ戦の誕生

戦後初の関東学生フェンシングリーグ戦が、昭和23年6月19日、午後2時から早大体育館で開始されることになりました。型通りの行事が行われ、主審森寅雄、副審佐野・進藤・池内、兵藤・三上の諸先輩方で開始されることになった。参加五大学のフェンシングチームのメンバーは次の諸君達でありました。

(明治大学) 永松初男・土屋武・奈良泰夫・中嶋英一・矢野善五郎・笹川清伍

(立教大学) 有尾譲治・面高俊信・神谷正一・山田章二・米村寺昭・清水光彦

(慶応大学) 北原新次・竹村新太郎・椎橋三郎・藤田晃・安沢信一・中山三雄

(早稲田大学) 原猛・畑中哲・中村栄太郎・深谷博之・斎藤正秋・越茂樹



中嶋有効命中で一本
中嶋(明大)―中村(早大)
新世界ニュース122号
(週間トピックス 昭和23年6月20日)

(法政大学) 柴田仁一・宿谷光行・園田真・小野辰弥・桜井孝政・森本和雄
戦後久しく途絶えていた、わが国学生フェンシング界も、本年4月、新たに学生フェンシング連盟を設立したばかりであって、このように早く本リーグ戦を開始することが出来たのは、この競技が、オリンピック種目であり、しかも、参加のための役員と選手の熱意が非常に強かったためと思われれます。
熱戦の結果を記しておこう。

リーグ戦の結果は、明治大と立教大が共に三勝一敗のため、首位決定戦を行い三対二で立教大が勝ち、一位立教大学、二位明治大学となりました。三位早稲田大学、また慶応大と法政大が一勝三敗であったが、勝点で慶応大が多かったので、四位慶応大学、五位法政大学とまりました。明治大学チーム内の成績をみると、奈良君四勝一敗、中嶋四勝一敗、永松君二勝三敗、土屋、矢澤君三勝二敗という成績でありました。

学生の戦後初の試合である、この春季リーグ戦について、当時の協会の理事長三上哲夫氏は、スポーツ毎日に次のような記事を寄稿しておられました。

「再生フェンシング、学生リーグ将来に期待」という見出しで、戦後初のフェンシング試合、関東学生フェンシングリーグ戦は、19と20日の両日、早稲田大学体育館で、明・立・早・慶・法の五大学の間に行われた。再発足以来、日が浅いにもかかわらず、進歩にはみるべきものがあつた。試合は慶・早・法を四



対一とそれぞれ軽く退けた優勝候補明大が、対立大に二対三で惜敗し、結局同率同士の間での決勝戦となった。かつての全米選手権保持者森寅雄氏について、テクニクの研究を重ねた立大は、よく明大の鋭峰を抑えて、再びこれを破って優勝した。

明立決勝戦では、これまでだれにも2タツチ以上許さなかつた明大奈良が、山田を甘くみずに攻めたならと惜しまれる。また永松が足の故障で第三日目全く不調だったのは、明大の不運であった。立大は戦前フェンシング部をもたず、先輩もないにもかかわらず、テクニクの徹底的な研究、特にカウンター、リボスの巧妙なる使用、あるいは、ハイ・ラ

				(第二日)				(第一日)						
(立大	3-2	明大)	(慶大	3-2	早大)	(明大	4-1	早大)	(明大	4-1	早大)	(明大	4-1	早大)
○米村	5-3	矢澤	○北田	5-1	畑中	○奈良	5-1	深谷	○奈良	5-1	深谷	○奈良	5-1	深谷
○神谷	2-5	奈良○	○竹村	1-5	深谷○	○矢澤	5-0	斎藤	○矢澤	5-0	斎藤	○矢澤	5-0	斎藤
○山田	2-5	中嶋○	○北原	2-5	中村○	○中嶋	5-4	中村	○中嶋	5-4	中村	○中嶋	5-4	中村
○有尾	5-1	永松	○椎橋	5-1	斎藤	○土屋	2-5	畑中○	○土屋	2-5	畑中○	○土屋	2-5	畑中○
○面高	5-4	土屋	○中山	5-4	原	○永松	5-1	原	○永松	5-1	原	○永松	5-1	原
(法大	3-2	慶大)	(明大	4-1	法大)	(立大	4-1	法大)	(立大	4-1	法大)	(立大	4-1	法大)
○宿屋	5-2	安澤	○土屋	5-4	森本	○面高	5-1	宿屋	○面高	5-1	宿屋	○面高	5-1	宿屋
○園田	3-5	北田○	○矢澤	5-1	柴田	○神谷	5-1	園田	○神谷	5-1	園田	○神谷	5-1	園田
○森本	5-2	中山	○奈良	5-2	小野	○有尾	5-3	小野	○有尾	5-3	小野	○有尾	5-3	小野
○柴田	1-5	椎橋○	○中嶋	5-1	園田	○米村	1-5	柴田○	○米村	1-5	柴田○	○米村	1-5	柴田○
○桜井	5-1	北原	○永松	4-5	桜井○	○山田	5-4	桜井	○山田	5-4	桜井	○山田	5-4	桜井
首位決定戦														
(立大	3-2	明大)	(立大	3-2	慶大)	(明大	4-1	慶大)	(明大	4-1	慶大)	(明大	4-1	慶大)
○山田	5-4	奈良	○神谷	5-0	北原	○奈良	5-0	中山	○奈良	5-0	中山	○奈良	5-0	中山
○米村	1-5	中嶋○	○有尾	5-1	椎橋	○矢澤	5-4	北原	○矢澤	5-4	北原	○矢澤	5-4	北原
○神谷	5-1	永松	○米村	4-5	中山○	○中嶋	2-5	椎橋○	○中嶋	2-5	椎橋○	○中嶋	2-5	椎橋○
○有尾	1-5	土屋○	○山田	1-5	北田○	○土屋	5-3	榎木	○土屋	5-3	榎木	○土屋	5-3	榎木
○面高	5-3	矢澤	○面高	5-1	榎木	○永松	5-3	北田	○永松	5-3	北田	○永松	5-3	北田
				(早大				(早大						
				5-0				3-2						
				法大)				立大)						
				○中村				○中村						
				5-3				5-1						
				○深谷				深谷						
				5-1				3-5						
				○畑中				○畑中						
				5-2				5-3						
				○斎藤				斎藤						
				5-4				2-5						
				○原				○原						
				5-3				5-4						
				柴田				神谷						

第2回関東六大学フェンシング秋季リーグ戦

10月3日(於、早大)

明大(26) 対

M	土屋	中嶋	矢沢	永松
H	5			5
M	5	5	5	
H	5	5	5	5
M	5	5	5	5
H				

法大(0)

H	園田	柴田	小野	桜井
M	3	4	4	1
H		4	3	2
M		3	3	2
H	0		0	1

10月9日(於、関東配電)

明大(18) 対

M	奈良	永松	中嶋	土屋
K	5		5	5
M	5	5		
K	5	4	5	
M		5	5	3
K				

慶大(4)

K	中山	椎橋	北田	北原
M	3	3	3	
K		4	5	0
M	2		2	4
K	0			5

10月10日(於、関東配電)

明大(18) 対

M	奈良	中嶋	土屋	永松
W	5		5	5
M	5	4		
W	5	3	5	2
M	5	5	4	5
W				

早大(8)

W	畑中	中村	斎藤	原
M	2	2	4	3
W		5	5	1
M	3		1	5
W	3	5		4

インのアタックを、ロー・ラインへ殺してのリボス、または「さそい」等々、そのテクニクの豊富さをもって優勝した。早大、法大はノー・パリーのリボスが多かった。ノー・パリーは、ダブル・タッチの際など、特に不利であり、ルールを熟知すれば、絶対になし得ないものであるから、更に十分な研究、錬磨を要する、また、慶大には、明大のようなおう盛な闘志がほしい。本リーグ戦は、フェンシングのフルレ、エツペ、サーベルの三種目中フルレのみであったが、普通フルレをマスターしてから、エツペあるいはサーベルのいずれかに進むものである。フルレは女子オリンピック種目でも重要な地位を占めている。日本人のデリケートな「わざ」の器用さをいかして研究し、練習したならば将来性のあるスポーツとなろう、(現協会理事長、三上哲夫) また、リーグ戦のレフリーをつとめた森氏は語る、として、次のような評もあつた。「総じて、技術及び試合気魄も向上しているが、各校共にリボスが未だ不十分であ

る。また試合時間の浪費から、体力の消耗も時折見受けられた。また、一突一突に乱発が多く、パリーもなかったようだ。個人の技術で光っていた選手は、奈良(明大)中村(早大)北原(慶大)神谷(立大)等で、今後共に学生フェンシング界では期待出来るものと思う。」とあつた。

関東大学の秋季リーグ戦は、昭和23年10月3日から開始されることになりました。先ず試合の結果をみると、



明治大学フェンシング部員

この秋季リーグ戦について、スポーツ毎日
は、10月18日次のような評を載せておりまし
た。
「明、覇権を獲得・フェンシング・リーグ
終る」10月3日から開始された関東学生フェ
ンシング秋季リーグ戦は、17日早大体育館で
行われ、明立戦を最後に終了しました。本リ
ーグ戦からは、来るべきオリンピックに備え
て、早くも1936年の国際規約に基いた方
法が取り上げられ、団体試合となり、個人の
ただ一本の結果もゆるがせに出来ない緊張し

昭和24年12月
第三回全日本選手権大会
(個人フルール第2位)



た試合となった。
選手も春の初リーグ戦に比して著しい進歩
を見せ、試合段階も明らかとなり、春には見
られなかった、ダブルのアタック・コンポー
ズされたり、リポステなどを多くの選手が使
用するようになり、ポイントも非常に鋭くな
ったが目立った。結局、春に立大と決勝を
行つて敗れた明大は、永松・中嶋・奈良等ム
ラのないスタッフをそろえて、危気のない試
合で順当な制覇を遂げることが出来た。初参
加の中大は、練習期間の短いわりに全員よく
まとまって、慶・法を退けて四位に進出した
のは賞されると思います。順位は①明大五戦
五勝(10点)②立大三勝二敗(6点)③早大
二勝三敗(4点)④中大二勝三敗(4点)⑤
慶大二勝三敗(4点)法大一勝四敗(2点)、
なお早・中・慶の三校は同点のため順位決定
戦を行い、早大二勝、中大一勝、慶大全敗で
三、四、五位と決定しました。かつての全米
サークル選手権保持者森寅雄審判長評「クロ
ース・デスタンスの試合が多かったが、もつ

10月16日(於、早大)

明大(18)

対

中大(2)

C \ M	奈良	中嶋	土屋	永松
半沢	5			5
足立	4	5		
石橋	5	5	5	
須郷		5	5	5

M \ C	半沢	足立	石橋	須郷
奈良	3	5	4	
中嶋		3	1	1
土屋			1	3
永松	4			0

10月17日(於、早大)

明大(18)

対

立大(14)

R \ M	奈良	中嶋	永松	土屋
神谷	5	5	4	5
面高	4	0	4	5
有尾	3	5	5	5
山田	4	5	5	3

M \ R	神谷	面高	有尾	山田
奈良	2	5	5	5
中嶋	1	5	0	2
永松	5	5	0	3
土屋	1	1	2	5

と間合を尊重して、ロング・ノーマルのデスタンスで行わなければならぬ。試合がすぐにクロス・デスタンスに入るのは、アームのペントが深過ぎると、左足が利かずにランジェが伸び切ってしまうため、またアタックのエッキステン드가不十分なためである。また上体のテクニックがほとんど見られず、すぐリトレートして、次のリポステを困難にしているが、今後研究の余地がある。左手が十分に上りきらないため、ターゲットが大きくなり、ローラインのアタックが利かず、ポイントが不十分なのが多かった。本リーグ戦はフルレのみを行ったが、来シーズンからは、エツペ・サーベルの試合も行いたい」と評しておりました。又、明治大学学生新聞も、「関東学生リーグに、またまた優勝の栄冠、明大フェンシング部」と写真入りで紹介、喜びを伝えておりました。

第三回の関東学生フェンシング春季リーグは昭和24年の6月、第一試合場は早稲田大学体育館、第二試合場は、永田町小学校体育館



試合風景

で、6月5日から26日の期間で開始されました。日刊スポーツ紙の下馬評では、「戦後の学生選手の進境は、各大学共にすばらしい発展を示しているので、オリンピック級の好試合が演じられよう、五月初旬の連盟強化合宿で各選手のテクニックが更にリファインされ、スピードを増しているので、飛躍的な好試合が展開されるであろう。フルレ・エツペ・サーベルを通しての総合優勝は、平均した実

力を持ち、試合巧者ぞろいの明大あたりに落ちつくのではあるまいか、フルレ 昨年の春は立大、秋は明大がそれぞれ優勝しているが、立大は復活以来の古豪わざ師神谷、山田に新人相田を加えて手堅い陣容を示し、明大は肩書つきの土屋、中島、奈良と一流どころを揃え、両校共に六大学随一のスタッフを誇っている、何れかに覇権が行くことは、先ず間違いないであろう。それに中大がすばらしい練習振りで、着々と成果を挙げているから、明立といえども決してあなどれない。エツペは、三種目中やはり最も淋しい種目で、エツペ・フェンサーと名乗り得る選手が未だ現われておらず、いずこに帰するとも決したいが、明立のフルレ陣がこれを狙っており、慶が相当に練習をつみ、椎橋あたりが鋭い片鱗を見せている。中大も豊富な陣容を示している、三種目中最も混戦を予想されるが、現在では未だフルレに強い明立あたりに落ちつくのではあるまいか。サーベルは、中大が世界最高水準のセーバー・フェン

サー森寅雄氏について、専門にコーチを受け、たゆまない練習を積んできているだけに、須郷、石橋、白井とリファインされたセーバー・フェンサーを揃えて自信を示している。一方明大はセーバー・フェンサー飯田を中心に三種目共に平均された実力を示している土屋、中嶋がおり、中大としても決してあなどれず、オーソドックスなだけに、まだまだ変剣に食われるおそれは多分にある。しかしセーバーは中大が最も有力である。以上三種目を眺めて見ると、エツペが全くこんとんとして、この行方が、春季リーグ優勝の重大なキイ・ポイントとなっている。今年から森寅雄氏より森賞が授与されるが、本リーグ戦は全く問わず、三個が予定されているので、各選手は優勝杯以上のあこがれをもっているだけに、フルレ・セーバー陣の張りきり方はすばらしい。(N)

さて、この展望に対し、競技の結果はどうだったであろうか、フルレの結果は表に示した通りであります、種目別の点数をまと

第3回関東学生フェンシング春季リーグ戦結果

△フルーレ

明大 対 法大
18 0

H	M	飯田	中嶋	土屋	奈良
宿屋	1	5			1
園田	1	5	2	5	
桜井	2	5	0	5	5
本田				1	5

明大 対 慶大
18 2

K	M	土屋	中嶋	飯田	奈良
椎橋	0	5			2
安沢	3	5	1	5	
中島	4	5	4	5	3
榎			0	5	4

明大 対 中大
18 8

C	M	土屋	中嶋	奈良	飯田
半沢	0	5		2	5
織田	1	5	3	5	2
白井	5	4	3	5	3
石橋	3	5	4	5	5

明大 対 早大
18 6

W	M	土屋	中嶋	奈良	飯田
斎藤	5	1		5	3
金子	0	5	4	5	3
畑中	2	5	2	5	3
原			3	5	2

明大 対 立大
16 16

R	M	土屋	中嶋	奈良	飯田
山田	5	3	5	4	3
神谷(宏)	5	3	3	5	5
神谷	5	3	2	5	5
相田	4	5	1	5	3

被突数
明大(60)
立大(66)

フルーレ順位

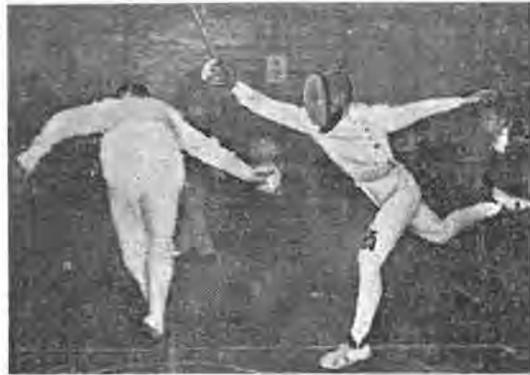
1. 明大 全勝 (10点)
2. 立大 4勝1敗 (8点)
3. 早大 3勝2敗 (6点)
4. 中大 2勝3敗 (4点)
5. 慶大 1勝4敗 (2点)
6. 法大 全敗 (0点)



めたのが総合成績表であります。明大と中大は共に22点となり、優勝決定戦を行うことになったのであります。結果は中大がフルーレとエッペで勝ち一位となったのであります。私達は優勝を信じ戦って来た挙句、しかも勝てる筈の試合を落してしまったために茫然自失、何がおこったのかも解らない程の状態に陥った事を想い出します。しかし、私にとりましては、このリーグ全試合のフルーレベストテンで15試合中14勝1敗で勝率が一位となり、夢にまでみた、森寅雄賞を受賞したのが最高の喜びでありました。



母校明大の後輩達
(昭和28年度高校定期戦 於立大)



試合風景

明大、中大22点で優勝決定戦

(フルーレ) (エッペ)

(明大)	(中大)	(明大)	(中大)
中 嶋 5-3	織 田	中 嶋 3-2	須 郷
土 屋 3-5	須 郷	奈 良 0-3	澤 藤
奈 良 2-5	白 井	土 屋 1-3	織 田
飯 田 3-5	石 橋	飯 田 3-3	白 井

○総合成績表

大学	種目	フルーレ	エッペ	サーブル	総合得点	順位
中 大		4	8	10	22	1
明 大		10	4	8	22	2
立 大		8	4	6	18	3
早 大		6	2	4	12	4
慶 大		2	6	2	10	5
法 大		0	6	0	6	6

同点決勝戦の結果
中大1位

△サーブル

明 大 対 法 大

18 0

H	M	飯田	中嶋	矢沢	土屋
森本	0	5			3 5
岩田	1	5	2 5		
山本	1	5	0 5	2 5	
園田				1 5	3 5

明 大 対 慶 大

18 0

K	M	飯田	中嶋	矢沢	土屋
本宿	0	5			3 5
中島	0	5	3 5		
椎橋	3	5	2 5	1 5	
藤田				4 5	3 5

明 大 対 中 大

14 18

C	M	飯田	中嶋	矢沢	土屋
石橋	5	1	5 3	5 4	4 5
白井	4	5	5 3	4 5	5 2
織田	1	5	0 5	2 5	5 4
須郷	4	5	5 4	5 3	5 4

明 大 対 早 大

18 4

W	M	飯田	中嶋	矢沢	土屋
斎藤	4	5		1 5	5 3
金子	3	5	3 5		
丸田	1	5	0 5	2 5	
原			5 4	2 5	1 5

明 大 対 立 大

18 10

R	M	中嶋	土屋	矢沢	飯田
内山	4	5	2 5	5 4	5 4
相田	1	5	5 2		
神谷	1	5	5 4	4 5	2 5
山田	5	4	3 5	3 5	3 5

このリーグ戦を通して、いろいろ反省させられる事がありました。何と言っても、長期間にわたるリーグ戦では、各々が責任をもつて、自分の体調を管理すること、これはスタミナを含めての事であり、精神力も非常に大切である事も痛感いたしました。チームワーク、基本技の練習も大切であることは勿論であります。大変勉強になったリーグ戦であったと思っております。

2、全関東フェンシング選手権

大会と全日本フェンシング選手権大会

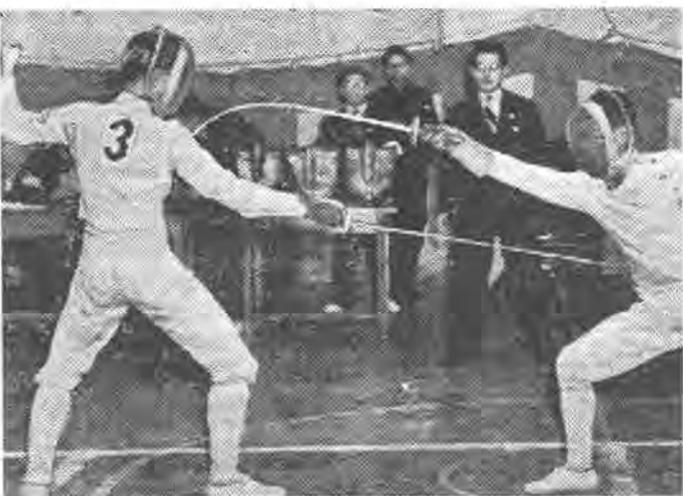
次に想い出に残る試合としては、何と言っても全関東フェンシング選手権大会と全日本フェンシング選手権大会であります。

戦後第一回の関東フェンシング選手権大会は全日本フェンシングの予選を兼ねて、昭和23年11月21日に開始されました。この大会の上位6位までが、全日本フェンシング選手権大会の出場権を得られる大会であるので最初

から激戦が予想される大会でありました。12名の選手が申込まれた、三上(明治OB)佐野(慶OB)池内(法OB)進藤(法OB)という錚々たる大先輩方でありました。明大からは永松、奈良、中嶋が申込み、総当りの熱戦が展開されました。結果は①奈良(9勝2

敗)②中嶋(8勝3敗、被突数26)③佐野(8勝3敗、被突数31)④池内(8勝3敗、被突数34)⑤進藤(7勝4敗、被突数34)⑥永松(7勝4敗、被突数36)という事になり6名の皆さんが全日本の出場権を得たのでありました。戦後初の全日本フェンシング選手権大会は明治大学体育館で開催されることになったが、25日の日刊スポーツは、全日本フェンシング大会展望として、次の様な予想記事が6段にわたり掲載されたのであります。「古豪に挑む新鋭」と4段の大見出しでした。「戦後フェンシング界の発展は真に目ざましい。とくに新進学生選手の進歩向上は、今や東京オリンピック選手候補の古豪OBに伍して何ら遜色がない、戦後初の全日本選手権大会は、

関東・関西の古豪OB陣に加えて新進気鋭の学生陣が一堂に会することは、けだし壯観であろう、また、エツペ、サーブルの公式試合が行われるのはこの度が最初であり……(以下中略)……「フルレ個人」佐野(慶OB)池内(法OB)牧(慶OB)は東京オリンピック候補選手で猛練習を重ねて来た古豪だけに、テクニクは極めて豊富であり、敵の出方、退き方によって、ダブル・グリッセ、カウスター、フレッシュ等々が自由自在に使いこなせる巧みさを有し、またそのフィンガリング・パリも完全にリファインされており、各々サーブル、エツペをマスターしているだけに頗る安定性が強い、一方新進学生選手、本年度関東選手権保持者奈良(明大)関東選手権二位中嶋は、テクニクの不足を、よく若さと意気で補いながら、関東選手権では、米国選手権保持者、森寅雄氏についての数度の合宿や、平常の練習量に物をいわせて、古豪OB陣を退けているので、彼等のスピーディーなアタック、リボステはOB陣も決し



全日本フェンシング選手権大会
中嶋(明大)、白井選手(中大)を破る

(サン写真新聞 昭和24年12月5日)

て侮れない、先輩への果敢な試合振りが期待される。(以下省略)との予想が出されたのであります。私の出場したフルレの結果は、①進藤(法OB)5勝2敗、②牧(慶OB)

5勝2敗、(二位決定戦の結果)③中嶋(明大) 4勝3敗、④池内(法OB) 4勝3敗、⑤永松(明大) 3勝4敗、⑥奈良(明大) 3勝4敗、⑦山口(関OB) 2勝5敗、⑧佐野(慶OB) 2勝5敗、となりました。日刊スポーツの戦評により「古豪OB陣は、さすがに数年の経験に物をいわせ、ダブル・グリッセ、カウンター、フレッシュなどあざやかなテクニクを見せ、予想通り、牧、池内、進藤の三巴戦となり、烈しい争覇戦となった。新進学生陣はこのような大試合になると矢張り堅くなつて平常の腕前が十分に発揮出来ず、テクニク不足からことごとく退けられた。しかし中嶋(明大)はこの中であつて、リファインされたスマートなフォームで3位に食込んだのは賞される。1位決定戦は、オリンピック候補選手であり、共に合宿練習した進藤と牧との間で争われ、エッペフェンサー進藤とサーベルフェンサー牧は見事なアタック、リポステに12米のコート一杯に全力を振つて縦横に闘いまくつた。結局進藤は後半力を盛

り返し、牧がアタックに出たのを見事なカウンターリポステで破り制勝した」とあり、今でもあの時の試合が思い出されます。因みにエッペは3本勝負で①池内(法OB) 3勝1敗②進藤(法OB) 3勝1敗③山口(関大OB) 2勝3敗、サーベルは5本勝負で、①牧(慶OB) 7勝②池内(法OB) 6勝1敗③佐野(慶OB) 5勝2敗という結果でした。

翌昭和24年の秋の関東学生フェンシング選手権大会では4位となつていましたので、全日本選手権予選の出場権を獲得、11月20日、23日の関東フェンシング選手権大会に出場したのであります。奈良、相田、白井、矢沢、金子、進藤、池内の各選手と対戦、4勝で4位でした。12月10日から始まつた第二回全日本フェンシング選手権大会では、好調でアタックもリポステもよくきまり、自分でも驚くほど順調に勝つことが出来て、6勝1敗で、京都の牧真一さんと同率決勝をやることになつたのであります。私も全力で頑張つたのであります。経験豊かな牧さんにはかなわ

ず5対3で敗れてしまいましたが、私にとりましては想い出に残る全日本の大会であり誇りとするものであります。因みに、▽フルーレの結果は、①牧真一(慶OB) 6勝1敗、②中嶋(明大) 6勝1敗、③池内(法OB) 4勝3敗、④堀口(同志社) 4勝3敗、▽エッペ①池内一郎(法OB) 6勝1引分②土屋(明大) 5勝2敗、③進藤(法OB) 5勝2敗、④斎藤(法OB) 5勝2敗、▽サーベル①飯田雄久(明大) 6勝0敗②須郷(中大) 4勝2敗③佐野(慶OB) 4勝2敗④石橋(中大) 3勝3敗、でした。

なお団体戦はわが明大チームが、京都クラブと決勝を争い18-14で敗れ優勝を逃してしまつたのでした。

大学卒業後の私は宮城に帰つてからも練習を続け、昭和25年11月12日からの関東フェンシング選手権大会に出場、フルーレの成績が7勝1敗で池内さんと同率となり、優勝決定戦となりましたが、敗れ、2位となつてしまつたのであります。全日本選手権大会は、4

勝4敗で第5位でありました。

私の大学時代のフェンシング競技はフェンシング四人男と言われた土屋、奈良、飯田の3君と私の4人で、戦後初の関西大学や同志社大学、立教大学等との定期戦もやりました。これも今では楽しい思い出となっております。



フェンシング四人男
戦後関西大学と同志社大学との定期戦で撮影された。左から右まで、土屋、奈良、飯田、私。

「土屋」は関西大学、奈良は同志社大学、飯田は同志社大学、私は同志社大学に在籍していた。この写真は戦後初の関西大学と同志社大学の定期戦で撮影されたものである。左から右まで、土屋、奈良、飯田、私。

宮城県フェンシング協会強化合宿
秋保温泉佐勘



高校定期戦(仙台一―法政二)
監督
駿河台ホテル前



宮城県高校チームメンバー



仙台一高チームメンバー

六、フェンシングの技術の向上と普及のために(その2)

1、宮城県フェンシング協会の設立と国民体育大会

大学も高学年となるにつれて、フェンシングの技術をより向上させたいという情熱と、家業を継がなければならないという、この二つの事が、常に私の頭から離れませんでした。フェンシングは、森寅雄先生から学んだ人間形成のための道であり、自分で納得のいくまで求めたかったです。家業を継ぎながらも続けるためには、学生時代からやって来たフェンシングの普及という仕事(使命感)を、より強力に押しすすめる事が必要であると思っただけであります。

これまで学生時代にすすめて来た一度きりの公開競技では、時が経てば消えてしまう

いう事を感じておりましたので、私は次の様な事を考えおしすすめようと思いました。
①先ず組織をつくる事でありました。フェンシング協会を、どんな形でもつくろうと思いました。
②普及活動と共に、フェンシングの実技指導の講習会は、自分が陣頭指揮をとり、どんな困難な事があっても継続していこうと決心し、覚悟もきめました。又、この機会を



トレーニングする中嶋
若柳小学校体育館

利用し、自分の練習も続けていこうと思いましたが、③次には直接フェンシングに参加する会員は勿論の事、陰に陽に私共を支えて下さる仲間づくりをしようと思つたのであります。これらの考えは、最初から固まつたわけではありませんが、使命感的な気持ちと共に少しずつ固まつて行つたものであります。

そして、先ずとりかかったのが、宮城県にフェンシング協会をつくる仕事でした。故郷、宮城県に帰り、県の教育委員会、各新聞社を訪ねました。全く知らない方に、フェンシング競技なるものを、ご説明申し上げるので、私には真剣でした。今考えますと、忙しい仕事の時間を割いて聞いて下さつたわけですから、或いはご迷惑だったかも知れません。このようにして歩きまわっている時、県の教育委員会ではつたり、私の築館中学時代の陸上競技部の恩師、片寄政直先生にお会いしたのです。天の助けと思ひました。そこで、早速、フェンシング協会をわが宮城県に設立するべく運動中であることをご説明申し上げた

のです。そしてご協力を強くお願い申し上げたのでした。

先生は各方面の方々にお話を下さり、話をすすめ易いようにして下さいました。そして、皆様のご助力によって、昭和25年2月ようやく宮城県フェンシング協会の設立にこぎつけたのであります。その当時の夕刊東北新聞社2月24日の記事には、「東北のスポーツに最適・フェンシングの名手中島君語る・米では婦人の間にも」の3段の見出しをつけ、6段にわたって掲載してくれました。あの時は本当に有難いと思つた事をはつきり記憶しております。「県フェンシング協会の発足にあたり、22日本社を訪れた栗原郡若柳町新町二八、中嶋英一君は明法学部、フェンシング部副将で、学生フェンシング界のナンバーワン、23年、24年度国体フェンシングのフルール優勝者、24年度全日本フェンシング選手権大会第2位の名手だが、日本のフェンシング界の現況や将来の抱負を次の如く語つた。(写真・中嶋君)」そのあとに私の説明が記されて

おりますが省略させて頂きます。そして「最後に室内競技ですから、雪の東北には良いと思います。私も卒業後は若柳の生家にいることになつたので、来るべきオリンピックを目標し、県内のフェンシングの普及にとめたと思います」と決意も述べ結んでいたようです。また、役員についても、「役員など決る。県フェンシング協会」の見出しで宮城県フェンシング協会は、22日本社会議室で既報の如

草創期の宮城県フェンシング協会のメンバー



長谷部省三氏
渡辺 公夫氏
荘司 雄三氏
佐々原 健氏

く設立、(22日の夕刊で日本フェンシング協会・県支部結成総会が、22日午前10時半から本社会議室で開かれた旨報道済み)役員として次の方々が発表されたのであります。▽会長・片寄政直(県教育委員)▽理事長・常松喬(県保健体育課長)▽常務理事・中嶋英一(明大フェンシング部副将)、同・野村陽三(夕刊東北新聞社)▽理事・佐藤信重(東北大教養部教授)同・市毛徳夫(県保健体育課)同・佐藤典吉(仙二高教官)同・菅原誠喜(仙商教官)同・久須見増男(白石高教官)▽監事・高橋哲男(白石女高教官)同・大川茂(夕刊東北新聞社)、事務局は県保健体育課内におかれて発足したのであります。全国でも珍しい地方のフェンシング協会は、ただちに日本フェンシング協会に加盟、活動を始めることになつたのであります。先ず公開試合であります。主催は、夕刊東北新聞社と宮城県フェンシング協会、後援、宮城県教育委員会、本県初のフェンシング公開試合を3月19日、仙台市の宮城野中学校の講堂で、午前、午後

の2回開いたのでありました。その時の出場選手と種目を紹介しますと、(1)選手入場と紹介から始まり、(2)フェンシングの説明と解説、学生選手権一位、国民体育大会優勝者の須郷智選手、(3)団体レッスン(全員)フルール、エツペ、セーバー、(4)女子フルール、レッスン、全日本選手権女子一位、田中実枝子選手、全日本選手権男子二位、中嶋英一選手、(5)サーブル二刀流の型、国民体育大会三位、織田毅選手、学生選手権六位、半沢範男選手、(6)個人試合(A)フルール(五本試合)・織田一有田・中嶋一白井、(B)エツペ(三本試合)・大久井・半沢一織田(7)模範試合等が行われました。この公開試合のほかにも重量挙げ競技も同時公開されました。こうして新しいスポーツの紹介を行ったのであります。この協会の普及行事とは別に、私は、同じ若柳町出身で明治大学でレスリングをやっていた鎌田君(旧姓栗原)に働きかけ、明治大学フェンシング部とレスリング部による、若柳町での公開競技も

企画いたしました。3月15日(昼夜2回)、若柳劇場において開会したのです。私は、何としても郷土の皆さんに理解して頂き、若い諸君達に挑戦して欲しかったのであります。

公開競技が開かれた昭和25年の秋、宮城県フェンシング協会主催の第一回実技講習会が、上杉山通小学校で開かれました。講師として小林政光君と私が参加、30名の皆さんが集まってくれました。渡辺公夫さん、荘司雄三さん、横沢勲さん、阿部さん、千葉卓朗さん、石橋和夫さん、佐藤美代子さん等々の方でした。この講習会は、剣、マスク、ユニホーム等は、後で準備すればよい。先ず始めようという事で始めたものですから、今では考えられないような事ばかりでした。剣の代りに竹、ユニホーム代りに上衣を前後を取替えて着たりと、各々が工夫をこらして参加してくれました。みみず腫れや、すり傷も何のその、私共について来てくれました。皆さん若い方々ばかりですから、笑い声の絶えない講習会でありました。この一週間の講習会のあと、毎

週合同練習会をしようという事になり、私も毎週土曜日にはフェンシングバッグを担いで仙台通いをする事になりました。これらの練習が実を結び、第3回国民体育大会にフェンシングの種目として、堂々と参加することが出来たのであります。

ここで私の国民体育大会との事について書いておきましょう。昭和23年の第3回国民体育大会(福岡国体)からフェンシング競技はオープン競技として参加することになったのであります。出場者はOBの先輩方8名、学生は14名の参加がありました。競技種目も、①団体は大学、高等専門学校試合、個人は②



全国選抜学生トーナメント試合③全国選抜学生個人試合、④全国選抜学生高点試合というものでありました。私は、④の全国選抜学生高点試合で第一位を獲得することが出来ました。第4回国民体育大会(東京大会)は都立第六女子高校体育館が会場で、副審をやりながらの出場でありました。私はフルール決勝で奈良、神谷、堀口、土屋、飯田の各選手と対戦して全勝、第一位となりました。この大会から府県対抗となりましたので、郷



昭和26年 第5回国民体育大会兼
第7回国民体育大会入場式
(於)宮城県競技場

土宮城県のため貴重な得点をしたわけですが、この国体に岩手県がエッペ団体とサーブル個人に参加、大久保裕輔さんが二種目に出場しておりました。

第3回県民体育大会兼第5回国体予選会の開会式は昭和25年9月15日晴れ上がった秋空のもと、約1万5千の観衆をあつめた仙台市宮城野原球場で行われました。仙鉄プラスバンドの吹奏楽にあわせ、国旗を先頭に他のスポーツ団体と共に私達はフェンシングのプラカードをかかげて、堂々の入場行進、球場を一周、ホームプレート前に整列、私共協会の理事長でもある常松喬県保健体育課長がひととき厳粛に開会を宣言、「君が代」「県民体育の歌」を斉唱、国旗、大会旗が掲揚され、大空にはためいた光景は今でも眼にうかびます。初のフェンシング競技は荒町小学校で開会いたしました。男子は高校も一般も一緒に16名の参加でした。種目はフルーレ、5本勝負でした。一回戦の勝者は長谷部、荘司、菅野、渡辺、石橋、阿部、中嶋(不戦勝)そし



昭和26年 国体予選 (於) 荒町小学校

て決勝プールは石橋、渡辺、荘司、中嶋で争われ、①中嶋英一(3勝)②渡辺公夫(2勝1敗)③荘司雄三(1勝2敗)④石橋和夫という結果でした。女子はフルーレ(3本勝負)3名の参加がありまして、結果は佐藤美代子さんが2勝で一位となりました。私達はその後も練習を重ね、秋保温泉で強化合宿までやって、ついに第5回国民体育大会(愛知国体)に宮城県チームとして初出場するまでになっ



第13回国体個人フルーレ3位(富山大会)
総合の表彰 1 神奈川 2 東京 3 宮城

たのであります。中嶋英一、渡辺公夫、荘司雄三、横沢勲、石橋和夫の諸氏が選手でした。第5回国民体育大会からフェンシングも得点種目(正式競技)に加えられることになり、各県チームも強化し強豪ばかりでした。私も個人フルーレでは前年度優勝者でありましたので最有望選手との予想を受けておりましたが入賞は出来ませんでした。

昭和26年になって下部の組織として東北電

力と仙台高校(石橋和夫主将)が加盟、更に、仙台一高に千葉卓朗君を中心として部が結成されて、県協会加盟となりました。そして、三月には、県協会主催の二回目のフェンシング講習会が開かれました。第一回目の昨年度の講習会とは比較にならない、全国のトップレベルを目標にした、はげしいものであります。仙台高校と立教高校との第一回の定期戦も立教大学体育館において、8月10日に開かれました。後援を関東学生フェンシング連盟にお願いし、審判長・主審は池内、須郷、佐野の大先輩方、副審には大学フェンシング部の諸君にお願いして開会することになったのであります。この大会には明治高校、早稲田高校も参加、4校で行われたのであります。仙台高校のメンバーは、主将石橋和夫、マネージャー古川光久、選手長谷部省之、太田圭二、桐ヶ窪進、大岩田の諸君でした。結果は仙台高22-10立教高、仙台高4-3明治高、仙台高6-2早稲田高でした。私にとって高校生の監督として遠征し、勝利する事が出来

たのですから喜ばしい事ではありませんが、同じ頃に関東地区で実施されていた神奈川県高等学校リーグ戦での浅野高校、法政二高、慶応高校、横浜商業の結果も気になっておりました。しかし、この対外試合で勝った事によって石橋君はじめ選手諸君達は、「やれば、出来る。」という自信を深める事が出来たのは確かであり大きな収穫でありました。池内審判長談にあつた「技術的にみて遠隔の地からやって来た仙台高が優勝したのは喜ばしい、又、試合も高校生らしい覇気のある所を見せてもらった。ただノーバリが多いのは玉に傷だ。」という言葉のとおり課題も多く残った遠征でありました。帰りの列車内で、まだまだ不十分、基礎から、もう一度やり直す積りで頑張ろうと激励して帰って来た事を思い出します。

次の定期戦は、昭和27年8月2〜3日、仙台高校体育館で開かれました。仙台高一立教高(第二回)これに仙台一高と法政二高も加わり実施されることになりました。後援宮城県フェンシング協会、河北新報社、結果は、

仙台高18―14立教高、仙台一高14―18法政二高、仙台高と法政二高は紅白戦で4―4被突数によって法政二高の勝、仙台一高と立教高の紅白戦は6―2で立教高の勝となりました、翌日は、個人戦、オールトーナメント、残った6名で決勝プール戦を行い、仙台一高の林君が優勝(5勝0敗)②太田(4勝1敗)③村井(立教高)④木島(立教高)でありました。

そして昭和26年、第4回県総合体育大会で国体予選を通ったメンバーで猛練習と強化合宿を重ね、上位入賞をめざし乗り込んだのであります。第6回国民体育大会(広島県三原市)一般男子選手として、中嶋英一(監督、選手)渡辺公夫、横沢勲、荘司雄三、目黒邦輔、千葉卓朗、一般女子選手佐藤美代子、高校男子選手、石橋和夫、長谷部省之、古川光久、太田圭二、総勢11名の宮城県選手団でした。この大会では一般男子では、中嶋がサーブル個人4位、荘司雄三氏がエペ個人5位となり、更に高校男子では仙台高校チームが、

団体優勝、個人フルール個人で、石橋和夫君が優勝を勝ちとつたのであります。フェンシング高校フルールの決勝戦では、仙台高校チームの石橋、長谷部、太田、古川の4選手が、京都洛陽高校チームと接戦の末18―14の辛勝でした。石橋主将は「優勝の自信はあつたが、勝つてうれしい、学校で部を4月に作つたが、努力の結果がこんなに早く出るとは思わなかつた。今後ますます練習し、明年の必勝も誓っています。」と語っておりました。この成績によってフェンシングの総合得点は23点をあげて第4位、天皇杯得点も11点を稼いで郷土の期待に応えたのであります。因みに順位は①東京②神奈川③京都④宮城⑤埼玉⑥千葉⑦静岡⑧大阪でありました。

翌昭和27年の第7回国民体育大会は、開催地問題をめぐり宮城、福島、山形の三巴戦から三県共催となった年であり、フェンシング競技は、福島県開催となつてしまいました。開催地としての一翼を担う本県としては、一般男子9名、一般女子4名、高校男子6名計

19名が乗り込み上位を狙つたのであります。が、一般男女は希望通りいかず、無念の敗退であつたが、高校生諸君が頑張り、団体第2位を獲得してくれました。

高校男子チームは、その後第8回も第2位、

昭和26年

第7回国民体育大会高校団体フルール決勝戦
主審 三井氏(立大主将)
右 佐々原氏(仙台高) 左 橋本氏(洛陽高)



第9回の北海道札幌大会では再び団体優勝を勝ちとったのであります。一般男子も第8回大会ではフルール団体第4位、中嶋もフルール個人4位を獲る事が出来ました。宮城県フェンシングチームとしての基礎づくり時代は昭和27年頃までであり、第7回国体への強化策時代を過ぎて、ようやく上位進出を狙えるチームづくりが可能な成長期に入っていく事になるのであります。昭和30年には第1回の全国高校フェンシング選手権大会(インターハイ)が仙台市で開催され、男子は仙台一高、女子は鼎ヶ浦高校とわが宮城県チームが初優勝を遂げ、更に鼎ヶ浦高校はインターハイ4連覇の偉業をなし、全国に「フェンシング宮城」の名を轟かせることになったのであります。個人では、千葉卓朗君、吉野美智子さん等のオリンピック候補選手を生み、更に昭和33年の全日本選手権大会では、千葉卓朗君と私が優勝を争う事があつたり、昭和34年の14回国体から21回国体までは、千葉卓朗、大和田智子、神馬加寿子さんが個人優勝し

たり、一般女子、高校男子も団体優勝するなどフェンシング宮城の名を不動のものとし、黄金時代を築きあげていたのであります。更に世界選手権大会に大和田智子、玉田順子、千葉卓朗、佐藤乃昭等の皆さんが会場され、東京オリンピックには千葉卓朗、大和田智子さんが監督、選手として活躍されました。誠に喜ばしい限りであります。

まだまだ本協会関係の方々の事を書きたいのですが、紙面の都合上申し訳ありませんが割愛させて頂きます。くわしくは宮城県フェンシング協会30年誌をご覧頂ければ幸いに存じます。

私はフェンシングというスポーツに巡り合い、全身全霊を注いでまいりましたが、たった一つ、未だに残念に思っていることは、第15回ヘルシンキ・オリンピック出場のために苦しい練習と候補選手としての厳しい強化合宿を経て、ようやく3月13日正式に候補選手として通達を受けながら、外貨の問題、フェンシング競技の実績がないなどの問題から出

場出来なかつた事が残念でしかたがありません、この悔しい思いは若い方々に二度と味わせたくないし、あつてはならない事だと思えます。

2、東北フェンシング連盟の結成と日韓親善大会

東北のフェンシング界もようやく動き始めるようになって来ました。昭和24年第4回国民体育大会に岩手県チームがエッペ団体とサーブルに大久保裕輔さんが出場、秋田県からも個人サーブルに山田章二さんが出場しております。それ以後は、組織的な動きが始まり



東北フェンシング連盟旗

ます。わが宮城県は前述の通りですが、福島県では、福島国体を二年後に控えて、県を挙げて動き出したのであります。慶応大学フェンシング部の初代主将藤田清太郎氏の出身県であり、又昭和26年全日本で活躍する遠藤国一郎氏もおり沢田恒一氏、北村友弘氏、北原光男氏の団体メンバーが第7回国民体育大会で優勝したほか、遠藤国一郎氏は、一般男子個人フルール優勝という輝かしい出発をとげるのであります。第8回国体でも遠藤氏は個人フルール三位、翌年第9回国体では船水光行選手を入れ、一般男子サーブル団体優勝、エッペ個人で船水氏が優勝、第11回国体では北原光男氏、船水光行氏、沢田恒一氏の三選手で一般男子のフルール団体とエッペ団体の優勝という快挙をなし遂げ、一般女子個人で竹内好江さんも二位となり、福島県は総合優勝を勝ちとつたのであります。東北各県ではうらやむばかりでありました。第12回国体でも沢田、船水、北原選手の団体メンバーでフルール団体優勝、竹内好江さんが個人2位と

なったのであります。しかし昭和33年以降は種々の事情から衰退の道をたどり、以後15年間国体不出場という事になって行ったのであります。私は、この様な他県の現況をみていて、何かやらなければと思っていたのですが、なかなか手が届かずにおりました。残念であり、申し訳なかつたと思っております。

昭和36年秋田県で国体が開催されることになり、そのために県協会の結成という事になり昭和33年秋田県フェンシング協会が結成されたのであります。ニッ井高校には佐々木信勝さんがおられ熱心に指導なされておりました。又、女子は聖霊高校が頑張り、秋田インターハイで共に準優勝をとるまでに実力が向上して参りました。

青森県の協会も昭和36年、結成されましたので、私は昭和37年、東北各県のフェンサー、フェンシング部のある高校に呼びかけ、仙台市でフェンシング大会を開催したのであります。この時佐々木信勝さんと市内スポーツ店を、こちらの予算にあつた優勝杯、楯の購入

のため歩きまわつた事もおぼえております。これを機会に連盟旗もつくろうと思ひ、東北地方をフェンシングをベースにして図案化し、各県のカラーの布地をあつめて縫い上げつくつたのでした。これが現在も東北総合体育大会フェンシング競技会場壇上壁面に掲揚されているのであります。

東北各県のフェンサーがこの連盟旗のもとに集まり、技を競う事によつて向上させるのが目的でありました。東北を制するもの全国を制す」が目標であり、合言葉でした。

そして昭和38年秋田市において国体予選も兼ねて第1回の東北フェンシング選手権大会が開催されるまでになつたのであります。昭和38年岩手県フェンシング協会、昭和40年山形県フェンシング協会が設立され、東北の全県がそろいました。誠に喜ばしい限りであります。東北フェンシング選手権大会も、昭和49年第12回の大会から通称ミニ国体の東北総合体育大会フェンシング競技大会と改称されました。

私が東北フェンシング連盟の組織づくりにおいて目ざしたものは、フェンシング人口を増やし、フェンサーの技術を向上させることは当然であります。それ以外にも、フェンシング競技を支えて下さる方々を、いかにして増やしていくかという事でありました。そのためには、各地に出張しての公開競技とその場での解説をしてご理解を頂く事が必要であると思ひます。私はこれを推しすすめて参りました。この競技を通して仲良くなること、仲間づくりであります。

又、フェンシングの選手諸君達に常に言つて来たことは、「東北を制する者、全国を制す。」とは言つてゐるが、これは合言葉であつて、単なる目の前の目標であり、最終目標であつてはならないと言う事でありました。これからは目は常に世界に向けておかなければならないと思ひます。外国選手といかに戦ひ、そして破るかという事でありました。一度戦つてみると剣の使い方、筋肉の鍛錬方法等、考えるべき点が多々あると思ひます。そこで先ず考

えたことは、隣国の韓国との親善大会でありました。友人の韓国フェンシング協会の金鐘圭副会長にお願いして、母校明治大学のフェンシング部員の遠征試合から始めました。これが昭和41年12月の事でした。第2回目の遠征は、同じく明治大学チームで、昭和46年8月でありました。第3回目からは、東北フェンシング連盟の選抜選手チームで対戦しました。3回目は韓国チームを日本に招き、若柳町と秋田市で大会を開きました。この大会あたりまでは、技術的にも体力的にも十分戦える相手でありましたが、韓国のオリンピック強化策が実つてからの第5回大会(平成4年)になりますと、相手は韓国体育大学のチームやナショナルチームとなり、わが東北連盟の選抜チームでは、全く勝ち目がなくなり、大いに反省し帰国して来た事を想ひ出します。あらためて強化策の重要性をひしひしと感じたのであります。

七、中嶋英一フェンシング 人生の足跡

スポーツ競技歴

- 昭和21年4月
明治大学フェンシング部副主将
- 昭和23年6月
関東五大学フェンシングリーグ戦初出場
- 昭和23年10月30日
第3回福岡国体個人フルーレ優勝
- 昭和23年11月1日
第3回福岡国体個人フルーレ勝ち抜き
高点試合優勝
- 昭和23年11月14日
関東学生フェンシング選手権大会
個人フルーレ四位
- 昭和23年11月21日
全関東フェンシング選手権大会
個人フルーレ二位
- 昭和23年11月23日
第2回全日本フェンシング選手権大会
個人フルーレ二位
- 昭和24年6月10日
関東学生フェンシングリーグ戦
個人フルーレランキング一位
- 昭和24年6月26日
関東五大学フェンシングリーグ戦
フルーレ一位
- 昭和24年11月1日
個人賞(森寅雄賞受賞)
- 昭和24年11月14日
第4回東京国体個人フルーレ優勝
- 昭和24年11月14日
関東学生フェンシング選手権大会
個人フルーレ四位
- 昭和24年11月25日
全関東フェンシング選手権大会
個人フルーレ四位



国民体育大会 一般男子フルーレ入賞者表彰式

1	2	3	4	5	6
船水	天野	中嶋	柏木	中原	沢田



国民体育大会

船水(東京)	中嶋(宮城)
--------	--------



国民体育大会 総合成績 宮城県第3位

1	2	3
東京	神奈川県	宮城

昭和24年12月4日

第3回全日本フェンシング選手権大会

個人フルーレ二位

団体フルーレ優勝(明治大学)

昭和25年10月25日

第5回愛知国体

団体フルーレ六位(宮城県)

団体エペ四位(宮城県)

昭和25年11月25日

全関東フェンシング選手権大会

個人フルーレ二位

個人サーブル七位

昭和25年12月5日

第4回全日本フェンシング選手権大会

個人フルーレ五位

昭和26年10月30日

第6回広島国体

一般男子個人フルーレ四位

高校男子団体フルーレ優勝(監督)

高校男子個人フルーレ優勝

石橋和夫(監督)

昭和27年3月11日

ヘルシンキオリンピック日本代表の正式候補に選出。3月13日正式に通達あるも、

視察員として牧真一氏のみ派遣

昭和28年10月30日

第8回愛媛国体

一般男子個人フルーレ四位

一般男子団体フルーレ四位

宮城県選手団旗手

昭和29年10月24日

第9回北海道国体

一般男子団体フルーレ三位

一般男子団体エペ四位

一般男子個人サーブル四位

高校男子団体フルーレ優勝(監督)

昭和30年10月30日

第10回神奈川国体

一般女子団体フルーレ四位

一般男子団体フルーレ五位(監督)

一般男子団体エペ六位

一般男子個人サーブル四位

昭和31年2月

東北フェンシング選手権大会

一般男子個人フルーレ四位

一般男子個人エペ四位

一般男子個人サーブル四位

昭和31年3月

第9回全日本フェンシング選手権大会

一般男子個人フルーレ七位

昭和32年11月29日

東北フェンシング選手権大会

一般男子個人フルーレ二位

一般男子個人エペ優勝

一般男子個人サーブル優勝

昭和32年10月26日

第12回静岡国体

一般男子団体フルーレ五位

一般男子団体エペ六位

一般女子個人フルーレ優勝

吉野美智子(監督)



宮城県フェンシング一般男女チーム

昭和33年10月19日

第13回富山国体

一般男子個人フルーレ三位

一般男子団体フルーレ二位

昭和33年12月13日

東北フェンシング選手権大会

一般男子個人フルーレ三位

一般男子個人エペ優勝

一般男子個人サーブル優勝

昭和34年1月16日

第12回全日本フェンシング選手権大会

一般男子個人フルーレ二位

一般男子個人エペ五位

昭和34年7月5日

東北フェンシング選手権大会

一般男子個人フルーレ二位

昭和34年10月25日

第14回東京国体

一般男子個人フルーレ優勝

千葉卓朗(監督)

一般女子個人フルーレ優勝

大和田智子(監督)

昭和35年10月23日

第15回熊本国体

一般女子個人フルーレ優勝

大和田智子(監督)

昭和36年10月9日

第16回秋田国体

高校女子個人フルーレ優勝

神馬加寿子(監督)

昭和37年5月

第14回国際フェンシング連盟通常総会出席(マドリッド・スペイン)

昭和37年5月

ヨーロッパフルーレ杯争奪選手権大会出場(バットダークハイム・西ドイツ)



試合風景
中嶋一メンツ(ポーランド)選手

昭和38年9月8日

東北フェンシング選手権大会

一般男子個人サーブル三位

昭和38年10月

日独女子交流フェンシング大会(仙台)

大会委員長日本チーム監督

昭和38年10月31日

第18回山口国体

一般女子団体フルーレ優勝(監督)

昭和39年6月10日

第19回新潟国体

一般女子団体フルーレ優勝(監督)

昭和39年10月

第18回オリンピック競技大会(東京)本部役員(組織管理委員及び日本放送協会)

解説委員)

昭和41年12月

日韓親善交流フェンシング大会(ソウル)

光州・大韓民国)明治大学チーム監督

昭和46年8月

日韓親善交流フェンシング大会(ソウル)

春川 裡里・大韓民国)明治大学チーム

監督

昭和48年9月

第1回日韓親善フェンシング大会(仙台)

秋田)東北選抜選手団団長

昭和50年9月

第2回日韓親善フェンシング大会(ソウル)

仁川 裡里・大韓民国)東北選抜選

手団団長

- 平成5年9月
アジアフェンシング選手権大会（東京）
大会副会長
- 平成6年10月
第12回アジア競技大会（広島）大会副会長
- 平成7年8月
第18回ユニバーシアード福岡大会本部役員
- スポーツ団体歴
- 自昭和21年4月・至昭和24年3月
関東学生フェンシング連盟技術部長
- 自昭和25年2月22日・至昭和25年8月
宮城県フェンシング協会常任理事
- 自昭和25年9月6日・至昭和44年9月
宮城県フェンシング協会理事長
- 自昭和26年4月17日・至昭和28年3月31日
明治大学フェンシング部監督
- 自昭和26年10月1日・至昭和45年10月
日本フェンシング協会理事

- 自昭和27年9月・至昭和29年5月
宮城県体育協会代議員
- 自昭和29年5月10日・至昭和50年4月30日
宮城県体育協会理事
- 自昭和38年9月・至昭和51年8月
東北フェンシング連盟理事長
- 自昭和44年10月・至平成7年5月
宮城県フェンシング協会会長
- 自昭和50年5月・至昭和60年4月
宮城県体育協会理事並びに強化委員長
- 自昭和51年4月・至昭和59年5月
若柳町体育協会会長
- 自昭和51年4月・至昭和58年3月
栗原郡体育協会連絡協議会会長
- 自昭和51年4月・至昭和58年3月
若柳町スポーツ振興審議会委員長
- 自昭和51年9月・至現在
東北フェンシング連盟会長
- 自昭和58年2月・至平成4年3月
㈱日本フェンシング協会理事

- 昭和58年7月
世界フェンシング選手権大会（ウィーン・オーストリア）日本選手団団長
- 昭和59年7月
第23回オリンピック競技大会（ロサンゼルス・アメリカ）日本オリンピック協会調査団役員



- 平成4年9月
第3回日韓親善フェンシング大会（ソウル・大韓民国）東北選拔選手団団長



- 昭和59年7月
アジアフェンシング連盟設立総会（ロングビーチ・アメリカ）議長

自昭和62年5月・至現在

若柳町体育協会顧問

自平成4年3月8日・至平成10年6月

(株)日本フェンシング協会副会長

自平成7年6月1日・至現在

宮城県フェンシング協会名誉会長

自平成8年4月6日・至現在

駿台フェンシングクラブ(明大OB会)会長

自平成10年6月・至平成13年1月

(株)日本フェンシング協会会長代行

自平成13年2月・至現在

勲日本体育協会評議員

自平成13年2月・至現在

(株)日本フェンシング協会会長

功勞事績

昭和31年9月7日

宮城県体育協会 勲功賞(第一号)

昭和35年10月23日

日本体育協会 国体出場十回以上表彰

昭和44年8月2日

全国高校体育連盟フェンシング部会表彰

昭和48年3月27日

日本フェンシング協会

森村賞受賞(第一号)

昭和48年6月

宮城県高体連フェンシング部会 表彰

昭和50年9月22日

大韓フェンシング協会 感謝牌

昭和53年9月30日

秋田県フェンシング協会 感謝状

昭和54年11月3日

宮城県教育委員会 教育功績賞

昭和55年8月31日

東北フェンシング連盟 功績賞

昭和55年11月22日

宮城県フェンシング協会 特別功績賞

昭和56年8月

仙台高校フェンシング部三十周年記念

感謝状

昭和56年11月

宮城県鶴ヶ浦高校フェンシング部

創立三十周年記念感謝状

昭和57年8月27日

東北フェンシング連盟 特別功績賞

昭和58年2月1日

勲宮城県体育協会 功勞賞

昭和58年9月2日

東北フェンシング連盟国際大会参加表彰

昭和58年12月10日

若柳町 教育文化体育功勞賞

昭和59年11月3日

宮城県知事 教育文化功勞表彰

昭和63年8月26日

第15回東北総合体育大会 功勞賞

平成元年9月17日

日本体育協会国体参加三十年特別功勞賞

平成元年10月10日

文部大臣 体育文化功勞賞

平成8年12月13日

宮城県体育協会創立六十五周年法人化

二十五周年記念 ①特別功勞賞

②体育協会会長賞 ③国体優勝栄光賞

その他の事績

。毎年、全日本選手権、国民体育大会には参加している。なお、平成3年より本部役員として参加している。

。平成8年開催の第五十一回広島国体においてフェンシング競技を観戦においてにられた常陸宮殿下、同妃殿下に競技ご説明役を務め、無事その任を果たした。

。平成9年開催予定の大阪国体リハーサル大会である第四十九回全日本選手権においてにられた高円宮殿下に、競技観戦のご説明役を務め、無事大役を果たした。

。平成12年7月3日

宮内庁から、スポーツ界を代表して、「ひんぎょう 宮祇候の儀」に参列者として推薦した旨連絡が入る。

7月19日、午後3時参入、祇候40分、責任を果たし退出。

。日本フェンシングの発展拡充のため、ジュニア層の発掘と競技の普及振興を目的として平成2年より開催している東北フェンシング少年大会は、その理念が東北のみに留まることなく、現在では、全国フェンシング少年大会を開催するまでになり、大きな拡りを見せ成果を上げている。



第51回広島国体フェンシング競技に御台臨の
常陸宮殿下、同妃殿下

㈱日本フェンシング協会会長 就任にあたって

私は、去る3月20日に開催された㈱日本フェンシング協会平成12年度第2回定期総会において、新たに会長に就任することになりました。

平成11年度、12年度の2年間は会長代行として務めてまいりましたのでその経験を生かしてこれからの協会運営に携わって行こうと思っております。

さて、我が国におけるフェンシング界の現状を申し上げますと、競技人口については、少子化の社会現象の中でも横這い状態を維持しておりますが、競技レベルについては、相変わらず世界のトップクラスとの差は歴然としており、そのことは昨年シドニーで開催されたオリンピック大会の成績を見ても明らかであります。

しかし、幸いなことに、年少競技者のレベルが比較的に高く、これをそのまま順調に伸



第49回全日本フェンシング選手権大会に御台臨の
高円宮殿下

ばしていけば、世界のトップレベルに追いつく可能性ががあります。

これからの事業方針も決定しておりますが、その最重点事項が選手強化長期計画であります。次のオリンピック大会（アテネ）では8位以内の入賞を果たし、その4年後のオリンピック大会ではメダル獲得を目指す目的で、小一中一高一大学一社会人と一貫した指導の実施、コーチ等の指導者のレベルアップ、国立スポーツ科学センターを利用しての科学的

なトレーニングの導入、有望種目・有望選手に対する強化費の重点配分等の施策を展開して行くこととしております。これが、私に課せられた技術の向上と普及（その3）にあたる仕事（使命）として邁進する所存でございます。しかしながら、これらの施策を実行して行くためには莫大な強化費が必要になります。また、平成14年度から高円宮杯選手権大会を国際フェンシング連盟公認A級大会として開催する計画もあり、こちらにも多大な経費がかかることが予想されます。

そこで、当協会では、平成13年度から新たに財務委員会を発足させ、これら資金の獲得に邁進することも決定しております。

終わりに、会員の皆様に対して、今後も㈱日本フェンシング協会を暖かくご支援くださるようお願い申し上げますと共に、皆様のご健康と競技力の向上を祈念いたします。



田村亮子選手と中嶋



日韓親善フェンシング大会
韓国新聞でとりあげられる

第32回国体・大会役員
(東北フェンシング連盟役員)



鈴木 英男氏
(秋田)
阿部 恒男氏
(宮城)
大久保裕輔氏
(岩手)

八、東北フェンシング界の育ての親

中嶋英一氏へのお祝いと 感謝の言葉

左の祝賀行事が開かれた際にお祝いの言葉を頂きました。方々の中から一部の方となりますが次に掲載させて頂きました。

- 。叙勲（勲五等雙光旭日章）祝賀会
- 。㈫日本フェンシング協会会長就任祝賀会
- 。宮城県フェンシング協会創立50周年祝賀会

祝 辞

宮城県知事

浅野 史郎

宮城県フェンシング協会が、記念すべき創立50周年を迎えられる運びとなりましたこと、また、当協会の名誉会長であります中嶋英一様が日本フェンシング協会会長に就任されましたことに対しまして、宮城県民を代表して心からお祝い申し上げます。

本県フェンシング競技選手の活躍は誠にめざましいものがあり、日本国内の各種大会では常に上位の成績を収め、国際大会におきましても日本代表として多数の選手を輩出するなど、非常に高いレベルを維持されております。これは、まさに宮城県の誇りであり、このように本県フェンシング競技の隆盛は、関係者皆様方の長年の御努力の賜と深く敬意を表するものであります。

今年はいよいよ本県において「新世紀・みやぎ国体」そして「第1回全国障害者スポーツ大会」が開催されることになりました。フェンシング競技におきましても、今日まで十分に研鑽を積まれた実力が遺憾なく発揮され、必ずや輝かしい成果を収められるものと確信いたしております。

現在、本県では、国体や来年の「ワールドカップサッカー大会」など、大規模な大会の開催を間近に控え、県民のスポーツに対する関心も非常に高まりを見せております。このような中、「県民総スポーツの推進」を目指す本県にとって、極めて高い競技力を誇るフェンシング競技には大きな期待が寄せられているところであります。

当協会が創立50周年の節目を迎えられましたことを契機に本県フェンシング競技選手がさらに活躍され、本県

スポーツ振興の先導役としての大きな役割を果たされま
すとともに、当協会のますますの発展を祈念いたしまし
てお祝いの言葉といたします。

日本フェンシング協会会長 就任を祝して

(社)日本フェンシング協会顧問
東京フェンシング協会会長

矢 澤 善五郎

中嶋英一氏同協会会長にご就任心よりお祝い申し上げます。

同氏はご承知の如く昭和21年明治大学フェンシング部
の戦後復活の当初、第一期生として入部、以来50余年に
わたり、言えばこの道一筋に尽力されて来た方でありま
す。

氏のフェンシングは、まことに流麗と申しても良い美
しい剣技で有りました。氏の得意とするところは、剣先
を低くとり相手のローライン膝のあたりでしょうか、剣
先を左右に振っていわゆるデガージマンではなく、水平

にゆれて来る剣法で、当然相手方はそれを払おうといた
します、その瞬間絶妙のタイミングでデガージマンする
のです。その一連の流れは決して誰もが真似の出来ない
見事なもので有りました。斯く言う私自身いかにこの技
を破るか腐心したものでした。

そして氏と私にとって最も大きいイベントは、なんと
言っても昭和39年に行われた東京オリンピック大会であ
りました。そのとき私もすでに30歳代半ばを越えてお
りましたが、兎に角戦後瓦礫と化した我が国の復興の現
状を世界に示す絶好の機会であり、何としても成功しな
ければと、寝食を忘れて頑張り通し、私も先輩と話し合
うとき、良き思い出として未だに話題にのぼるものであ
ります。

そしてこの度、晴れて日本フェンシング協会会長とな
られたのも、先輩のこの経歴と人柄をもってしてむしろ
当然のことと言えましょう。この上は、我が国のフェン
シング界の発展はもとより、アジアの中の協会であり、
世界における我が協会として、益々大発展を遂げるよう
ご尽力賜りますよう、我々も決してご協力を惜しむもの
ではありません。今後とも充分ご健康にはご留意なされ、
ご指導いただきますようお願い申し上げます。

祝 辞

(社)日本フェンシング協会

副会長

船 水 光 行

宮城県フェンシング協会創立50周年、並びに中嶋英一
(社)日本フェンシング協会会長ご就任誠におめでとうござ
います。

50年の歴史を刻む宮城県フェンシング協会は、戦後の
混乱の中、中嶋英一氏が情熱を注いで発足を見た協会で
す。その創設者である氏が、この度(社)日本フェンシング
協会会長の職に就かれたことは、地元の皆様にとって大
きな喜びであり、また誇りとされるところでしよう。

氏は日本フェンシング界の頂点に立たれました。その
半生は正にフェンシングと共にであり、その功績は文部
大臣体育文化功労賞に続く、勲五等雙光旭日章を叙勲さ
れたことで明らかです。

私も、宮城県フェンシング協会から強化合宿や大会に
今まで幾度となくお招きいただき、皆様と剣を交える機
会がありました。その度に参加されている選手はもちろ
んのことコーチ先生方の勉強熱心で真摯な姿勢に感銘を

強く覚えたことを思い出します。このフェンシングと向
き合う発足以来変わらぬ真剣な姿勢が、今日、日本のフ
ェンシング界をリードし名選手を数多く送り出した原動
力であると思えます。

此の度は二重の祝賀を関係者の皆様と共に祝い出来
ますことを感謝し、千葉卓朗会長を中心とした宮城県フ
ェンシング協会の今後益々の隆盛と中嶋英一(社)日本フェ
ンシング協会会長のご活躍をご祈念申し上げます。

協会創立50周年を迎えて

宮城県フェンシング協会会長

千 葉 卓 朗

昭和25年、前年度国体個人優勝の実績を引つ提げて郷
里若柳町に帰郷された中嶋英一師が、宮城県にもフェン
シングを普及させようと蒔いた一粒の種が、情熱的など
指導のもと見事に花開き、オリンピック選手並びに日本
を代表する国際選手を輩出し、二十回にも亘るインター
ハイ団体個人の優勝、多くの全日本チャンピオンの誕生、
国体の優勝等華やかな歴史を刻みながらここに創立50周

年の輝かしき記念式典の日を迎えることにあいなりました。

この日を迎えることが出来たのも、お忙しいなかご参会の方々はじめ関係する全ての皆様のおかげと深く感謝を申し上げる次第でございますが、何と云っても長い間、理事長、会長として第一線にたつて我々会員を、時に叱り、時に励まし、常にご指導に余念なく今日までたゆまずリードした下さった中嶋師あつたればこそとただただ感謝申し上げます。

この記念すべき年は同時に本県で開催される新世紀宮城国体の年でもあります。この国体こそ我が協会が歩んできた50年の集大成として、会員一丸となって初の総合優勝を成し遂げ一段と輝きを添えたいものと決意をいたしているものであります。皆様方になお特段のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

さてこの時期、3月の全国総会において、我々の誇り、中嶋師が満場一致で第七代会長に選任されました。遂に斯界の頂点に立たれたわけでありますが、お祝いを申し上げますと同時に、大変なご苦労も背負われたわけでありますので、ご健康に留意されながら存分のご活躍をなさいますことを心からお祈り申し上げます、ご挨拶といたします。

お祝いの言葉

（社）日本フェンシング協会
専務理事

浅井 哲 男

21世紀最初の年、しかも宮城国体開催の記念すべき年に創立50周年を迎えられ、誠にめでとうございます。宮城県フェンシング協会は、我が国が第二次世界大戦の敗戦からやっと立ち上がり始めた頃に創立され、爾来東北地方の核として東北各県のフェンシングの普及に貢献され、現在では圧倒的に競技人口が多いブロックに育てられた功績は誠に大きく、賞賛する言葉も見つからない程感謝致しております。

このことは、創立者である中嶋英一氏は勿論のこと、後に続いた千葉卓朗氏をはじめとする協会役員各位の努力の賜であり、心から敬意を表します。

一時出遅れた感のありました小中学生フェンサーの育成も、宮城県少年大会の開催や県下各地での教室の開催等急ピッチで進められ、最近では全国少年大会等で優秀な成績を取られる選手も現れており、将来にわたっても盤石な協会運営が為されることが約束されていること

は、誠に喜ばしい限りであります。

そして、中嶋英一名誉会長さんの（社）日本フェンシング協会会長就任も、重ね重ねおめでとうございます。

戦後の我が国におけるフェンシング競技復興の功労者である中嶋さんが、4年後8年後のオリンピック大会に向けて、日本フェンシング協会が勝負に打って出るこの年に、会長になられたことは誠に意義深く、我々執行部にとつてこれ程心強いことはありません。

中嶋会長を先頭にして、がむしゃらに我が国フェンシング界発展の為に努力する所存でございますので、なにとぞ今まで以上のお力添えをお願い申し上げます。

終わりに、宮城県フェンシング協会の益々の発展と宮城国体の成功、併せてご列席の皆様のご健康、ご多幸を祈念し、お祝いの言葉と致します。

中嶋英一さんの

日本フェンシング協会会長

就任によせて

仙台高校フェンシング部

OB・OG会

名誉会長 石橋 和夫

早いものであれからもう50年が過ぎた。

昭和25年の春に宮城野中学校で東北地方初のフェンシングの模範競技会が開かれました。

当時バスケットボールをやっていた私は、上背がないために何か他のスポーツを！と思っていた時であったので、早速見学に出掛けた。

ところが、所定の時間になつてもなかなか競技が始まらない。どれくらい待ったのであろうか。観客がザワザワし出した時に、白いユニフォームに身を包んだ二人の選手が何の前触れもなく試合場に現れ、数合の渡り合いをし、一言も言わずにサツと引き上げた。それと入れ替わりに開会宣言されて模範競技が始まった。この時、最初に現れた二人の内の一人が中嶋さんであった。この鮮

やかなプレゼンテーションに魅せられて私はフェンシングを始めることを決意した。

翌年の夏、仙台高校は立教高校との定期戦を組み、東京遠征を行なったのであるが、これも全て中嶋さんが段取りを付けたものであった。今では仙台と東京とは2時間足らずの距離であるが、当時は高校生感覚として、遙かなる都であつたから、この定期戦を企画し短日月に実現させた中嶋さんの力量には驚嘆敬服したものである。この定期戦での好成績がその年の秋の広島国体での高校部の団体/個人の優勝へと繋がつたのであつて、後日あの東京遠征が全国征覇への布石であつたことを思い知らされた。

この様に中嶋さんの構想力は大きく深く、常に常人の上にある。

既に、会長代行として実質的会長職を担われているが、今回の日本フェンシング協会会長御就任は、一番弟子の一人であることを自認する私にとって喜ばしいことであり、心から御慶び申し上げたい。

バレーボールやサッカーが一つの大胆な企画に依つてメジャースポーツにのし上がった様に、日本のフェンシングが中嶋新会長の辣腕によつて現在のマイナースポー

ツから、よりポピュラーなスポーツに進展して行くことを願つてやまない。

師中嶋英一氏に贈る

仙台高校OB

太田 圭 二

日本フェンシング協会会長に就任なされましたこと、慶賀の至りに存じ上げます。このたび師におかれましては、「私の履歴書」編纂を思い立たれました由承り、師の門下生といたしまして、青春時代のすばらしい思い出等、感謝の意をこめて寄稿させていただきます。

師は昭和二十五年三月明治大学法学部卒業後、株式会社中嶋屋の事業経営に専念する傍ら、日本フェンシング界の振興・発展に、高等学校生徒への普及選手育成を重視し、昭和二十五年七月宮城県仙台市立上杉山通小学校体育館に於いて、エキジビションを開催、第一期生・渡辺公夫・横沢勲・荘司雄三(三氏剣道有段者)と県立第一高等学校千葉卓朗・市立仙台高等学校石橋和夫の各氏が入門し、師は宮城県フェンシング協会を創立認可され

初代理事長に就任されました。

同年の第五回国民体育大会に石橋和夫氏が代表参加、当時仙台高等学校一学年生の太田は、朝礼時石橋氏の挨拶に強烈な感動を受けた思いが鮮明に残っております。国体後、石橋和夫・長谷部省之・古川光久の各氏がフェンシング部を設立、部員募集に応じ、太田圭二・桐ヶ窪進が入部しその後佐藤武・佐々原健ほか多数の入部者によつて組織化され、師中嶋英一理事長の厳しい指導・長時間に及ぶ苛酷なるレッスンに耐える事により、当時国内最強の高等学校男子フェンシングチームの誕生となつたわけです。県大会で国体出場権を獲得し、仙台高等学校メンバーとして第六回国体(広島)高校男子・団体優勝・個人優勝(石橋主将)、初参加チームでの全国制覇を為し遂げた感激は多大なもので、選手生活の継続を決定づけられ、株式会社間組・仙台支店勤務の父太田松次も深い理解を示してくれ、その上に当時の支店長・専務取締役小谷金馬様にも私と選手団への援助・応援を戴きました。

高校選手時代の自分にとりまして、第七回国体(福島)兼第一回全国高校選手権大会で準優勝に甘んじ、優勝権を師中嶋監督にお渡しすることができなかつたこと、そ

の無念さは生涯の思いとして残っております。

高卒後、明治大学商学部商学科に入学し、体育会フェンシング部員としての活躍が始まり、国体には第八回(松山)・第九回(札幌)・第十回(神奈川)に参戦いたしました。昭和三十一年九月県大会兼国体予選では三種目完全優勝をはたし、同年十一月開催の第十一回(兵庫)国体でのフルレ団体優勝を獲得出来れば、永年月多大なご指導を戴いた師中嶋監督へのご恩返しの一端になるものと決意を新たにしておりましたが、当時は学卒の就職難時代で入社目標とする会社の試験日と重なり、出場辞退の申し入れとなり、ご恩返しの実現が出来ず誠に申し訳なく存じております。ここで特に記載させて戴きますことは、師中嶋英一氏の門下生に対する基本的教育理念は「礼に始まり・礼に終わる」大変に厳しいものであつたと思ひだしております。遠征選手団にたいしては、知識・教養を身につけさせるために、各年の国民体育大会参加選手団(10名~15名)の多人数を大会終了日以降に開催地近隣の歴史に残る名所・旧跡の見学に、一日~二日をかけ勉強させて戴きその上に有名温泉に宿泊、翌日帰路につく行程を毎年実行されておりました。

その間に発生する移動交通費・食費・宿泊費等の総て

が、師中嶋英一氏の私財支出に依るものであったと記憶いたしております。

厳しく、苦しい選手生活のなかで、すばらしい体験をさせて戴きました事は、私の生涯にわたる代え難い心の財産となっております。深く感謝いたします。

先輩には、日本・東北・OB会の会長職を全うされる事は大変な労力と時間を必要とされるものと思われますが、ご健康に充分ご留意なされまして、益々のご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。

中嶋英一さんの

日本フェンシング協会会長ご就任に

心からのお祝いを申し上げます。

仙台高校OB

元NHKアナウンサー

プロ野球記者デスク

杉山 博 康

中嶋英一宮城県フェンシング協会名誉会長が、二〇〇一年三月二十日、日本フェンシング協会々長に正式就任された。

会長代行からのご昇格で、最高指導者としてますますのご活躍を祈念いたします。

中嶋さんに私が初めてお会いしたのは、昭和二十七年、仙台高校一年生の時でした。

当時は、NHKのラジオ放送と進駐軍のFEN放送の時代でした（テレビ放送と民放ラジオ放送は、一年後の二十八年に始まる）。四月に講和條約発効で日本がようやく独立。ヘルシンキオリンピック夏の大会に戦後日本が初参加した年でした。

私は、中嶋さんのフェンシングを通して、先ず、Saluteに始まり、Saluteに終る挨拶と礼儀を教わりました。

続いて、基本の大切さ、兎に角、継続する、創意工夫と集中、自信を持つ、平常心、更に、思い遣り、配慮の精神、など数多くの人生訓の教示を受けました。

貴重な指針を15歳から17歳の高校時代に体得したことは、父親の急死で、進学するか否かの、人生最初の大ピンチを切り抜けることにつながり、その後、NHK第39期アナウンサーとして、メディアの最前線を歩く中で、強い確かな支えとなりました。仕事柄一流の人達に接する度に、その訓戒を、改めて、繰り返し噛み締めて

いました。数々の中嶋さんのご指導に心からのお礼と感謝を申し上げます。そして、この機会に、中嶋さんのフェンシングの草創史を少々認めさせていただきます。

中嶋さんは、日本フェンシングの道を、一九四五年（昭和二十年）から二〇〇一年迄五十六年間、前進し続けている。数々の顕彰を受賞される中、九九年（平成十一年）には、勲五等雙光旭日章の秋の叙勲の榮譽に輝いた。お祝いの会が東京と仙台で開催されたが、東京の会には、全国から一〇〇人を超える懐かしのフェンサーや各界の人達が、駆けつけて、中嶋さんの信望の厚さを伝えていました。

中嶋さんは、終戦直後の一九四五年（昭和二十年）の秋、明治大学二年の時に、初めてフェンシングの剣を手にした。剣道の名士でアメリカから帰国直後の森寅男氏の指導を受けた。桐生市の森氏の自宅へ、土屋氏（故人）と浅草から東武電車を通い、厳しい食糧難の中、サツマ芋をご馳走になり乍ら、フェンシングの技を修得。二十二年九月に明大フェンシング部を創設。二十三年には関東五大学連盟を結成。選手としては、学生選手権の優勝は勿論、国体でも二十三年と二十四年に、フルーレ個人で二連覇を飾り、第一人者であった。特に、華麗なフ

ォームからの速攻と鮮やかなリポステは、模範のフェンサーとして定評だった。

明大卒業後、宮城県若柳町に帰郷して、実家の家業、中嶋屋呉服店を継承する一方でフェンシングの普及活動を開始した。

先ず、五十年（昭和二十五年）二月二十二日、宮城県フェンシング協会を設立。理事長に就任。間もなく、フェンシング講習会開催の告知を六月三十日付の東北民友新聞紙上に掲載。かくして、東北で最初の講習会は、仙台市立上杉山通小学校の講堂で、七月八日から十四日迄の一週間、新しいスポーツの堂々の公開講習会となった。夕刊東北新聞は、東北配電（現、東北電力）、仙台市役所、五橋中学教員、藤崎百貨店、仙台一高、仙台高校などから20人が参加と報道した。

仙台一高の千葉卓朗氏と仙台高校の石橋和夫氏は、切々母校に部を創設し、両校は良きライバルとして、切磋琢磨を続けることになる。

中嶋さんは、毎週土曜日、若柳町から仙台に出張して全て自費で宿泊し、協会練習という合同練習を指導した。フェンシングの普及に情熱を注いだ中嶋青年の並々ならぬ決意が込められていたのである。

昭和二十五年は、プロ野球がセは八球団、パは七球団の二リーグに分かれた年。宮城球場開きが五月三日に行われ、一塁側内野入口で、観客殺到に依る死傷事故が発生。私は、事故を目撃後、毎日対大映、毎日対南海の変則ダブルヘッダーを観戦。中学生時代の記憶である。

中嶋さんが最初に指導した仙台高校は、創部二年目の昭和二十六年、第六回広島国体の高校男子フルレで個人と団体ともに部出場で初優勝を飾った。個人優勝の石橋和夫氏は、第一回講習に参加した。初代主将。

中嶋さんのオーソドックスなフェンシングを受け継ぎ、名門仙台高校フェンシング部の基礎を築いた人である。団体優勝の四人は、石橋、長谷部省之、古川光久の三氏が三年生、太田圭二氏が二年生だった。石橋、長谷部、古川の三氏は、仙台高校フェンシング部初代の三銃士で、その強い絆は、創部以来、今も続いている。仙台高校は、昭和二十七年の福島国体で、太田圭二(二代主将)、桐ヶ窪進、佐藤進(三年)、佐々原健(二年)のメンバーで高校男子フルレ団体で準優勝と健闘した。

翌二十八年の東日本高校男子フルレ個人では、佐々原健氏(三代主将)が優勝を飾った。

佐々原氏の一年後輩の私は、中嶋さんからご指導をい

ただいた中で、昭和二十九年の第九回札幌国体に出場したことが、今も鮮明な思い出になっています。

宮城県チームは、中嶋青年監督以下高校男子三人を含む精鋭九人が、鳴子温泉の姥の湯旅館に米を持参して宿泊し、鳴子小学校の木造教室と校庭で強化合宿を行いました。

高校男子チームの鈴木新造(仙台高主将)、黒田伸介(仙台一高主将)、杉山博康(仙台高)の三人にとつて、中嶋監督をはじめ、石橋和夫(東北大)、明治大学の千葉卓朗、太田圭二という日本でトップクラスの先輩達との練習は、それは大変なものでした。しかし、一本取るのに必死で挑戦しかなりの自信をつかんだことを思い出します。

中嶋さんは、長所を誉めるといふ感じで高校生達を指導する一方で、気分転換に鳴子の名所巡りをするなど厳しい練習の中に、リラックスムードを巧みに駆使されたことを思い出します。

八月十九日からの札幌国体では、高校男子フルレ団体の決勝で、宮城県は新潟県に快勝して見事優勝を飾った。鈴木と杉山は、個人戦にも入賞しました。私は、前の年の国体予選の仙台一高戦で四戦全敗した苦しい思い出を、跳ね飛ばす結果を出した。宮城県チームは、一般男

子の活躍もあつて、総合三位の好成績を挙げたのである。

札幌からの帰途で、中嶋監督は、チーム全員を洞爺湖温泉に特別招待された。国体出場の一ヶ月間に私は、鳴子、定山溪、洞爺湖と有名三ヶ所の温泉巡りを体験したのである。

処で、中嶋さんは、遠征の都度、見聞を上げよう」と必ず、名所巡りや社会見学コースを設定されたが(大分、後日に知ったことですが)全て費用は、ご自身で負担されていたということ、中嶋さんがフェンシングの弟子達を、如何に大切にしていたかが、うかがえます。尚、札幌国体で津軽海峡の往復に乗船した青函連絡船「洞爺丸」は、その一ヶ月後の九月二十六日台風15号で、函館港外に沈没し、死者行方不明者一、六九八人の最大の海難事故となった。

第一回練習会に参加した仙台一高の千葉卓朗氏は、仙台一高の初代主将のあと明大の主将もつとめた。昭和三十三年、名古屋の全日本男子フルレ個人決勝で、中嶋さんと対決して、初優勝を飾る。翌三十四年の東京国体一般男子フルレ個人でも優勝を果たした。

昭和四十年代には、日本フェンシング協会の理事長に就任。又、宮城県本吉町の町長として、地方行政にも永

年尽力された。その後、中嶋会長のアとの宮城県フェンシング協会々長を引き継いでいる。

千葉氏が創設した仙台一高は、昭和二十八年の国体に出場したあと、昭和三十年仙台市で開催の第一回全国高校選手権、男子フルレ団体で初優勝を果たす。

一方、女子で輝かしい成績を樹立している鼎ヶ浦高校は、昭和二十七年十一月十三日の(気仙沼市での)中嶋さんを中心としたフェンシング講習会をきっかけに、部が誕生し、千葉卓朗監督、佐藤美代子部長先生(第一回の講習会に参加)の指導の下で、三十年の第一回全国高校選手権優勝をはじめ団体・個人に数多くの優勝を重ねている。

宮城県のフェンシングの草創期には、男子が仙台高校と仙台一高、女子は、鼎ヶ浦高校と宮城学院で夫々活動を行っていた。

尚、昭和二十七年、石橋和夫氏は東北大学の初代主将として、又、長谷部省之氏は東北学院大学の初代主将として夫々同好会を作り、やがて間もなく、いずれも部に昇格している。

中嶋さんは、東京オリンピックの招致にも尽力され、六十四年の東京オリンピック大会では競技役員の他に、

NHKオリンピック放送のフェンシング中継放送の解説を担当された。私も放送委員の一員として、世界のトップレベルのフェンシングに感動したことを思い出します。特に男子フルール決勝の圧巻！

草創期の事務局を担当した私は、協会を離れて四十年になりますが、中嶋さんの旗の下に参集した諸氏は、佳き先輩がお揃いだったと、楽しく記憶を手繰っています。特に、中嶋英一名監督にお会い出来たことが、何よりの誇りになります。中嶋さんの草創史を中心に昭和三十年（五十五年）前後迄を認めました。

宮城学院高OG
日女体大OG

藤森玲子
(旧姓 伊藤)

創立五十年と日本フェンシング協会会長職に御就任されましたこと本当にお喜び申し上げます。

中嶋さんから始められた宮城県フェンシング協会の片隅に私を三十数年おいて下さいましたこと有がとうございました。

三十数年前、あの白いユニホームにひかれた時のこと

を思い出してみました。隣の席は大石千代さん、授業中に二人で映画雑誌「スクリーン」を見て映画の話をよくしていたものです。

写真の中に美女の白いユニホームが出て来たと思えます。馬術を始めたかったのですが、私達を見られて馬が可愛想っていわれてショックでした。

それではあの白いユニホームを夢みて……高校二年フェンシング同好会に入りましたが、靴だけは減りますが、皆さんのようには上手にはなれませんでした。

特に中嶋さんは、優美で軽やかでスルスル。キリツとスピード。全部そろっていらつしゃいました。羨しいと思いました。そしてすぐ大石千代さんは転校、宮城学院のメンバーも少し変わりました。新田さん、吉野さん達に勝てたら私達日本一になれるのね、なんて夢。でも、私に間違いのチャンスがやって来ました。高校三年運良く勝て、岡山の国体に連れて行って戴くことになりましたが、行く前の合宿ではさぞ御心配だったことと存じます。

国体列車の中でも、雲の上の中嶋さんとは、お話が出来なかつたと思います。「みかん」をむいて差上げたときに「将来いい嫁さんになるよ」と云われたときの驚き、（その通りになりました。これは冗談です。）

中嶋会長との思い出

県ヶ浦高校OG
東京オリンピック日本代表
専修大OG、監督

大和田 智子

その後日女体大に行くことになりました、と報告をいたしました。すぐ「明大に練習に行きなさい」と道筋をつけて下さいました、気配り、感謝申し上げます。卒業後、宮城学院、常盤木、そして聖和学園と学校に恵まれフェンシングとも離れることなく、生徒達と交流を続けております。

今は癌との戦いです。放射線も29回目あと一週間は頑張ります。

この頑張り、中嶋さんにお会いするたびに大きな病気をなされた方とは思われない力。気力、努力。そして奥様の介護のよさを感じました。どんなにか大変でしたでしょうにお会いするたびに、私の病気を心配、そしてはげまして戴き本当に感謝申し上げます。

又、フェンシングを通しての沢山のお友だちは、まだ頑張ろうとしている私をささえて下さっております。

これも事あるごとに遠い若柳からフェンシング普及のために、御苦労された中嶋さんとのご縁があったからです。

これからもどうぞお身体を大切に御活躍をお祈り申し上げます。とともに御奥様の御健康をお祈り申し上げます。本当に有がとうございました。

会長就任おめでとうございます。日本のフェンサーの夢である世界制覇の実現に向けて力を発揮されますように期待に胸をふくらませております。会長との思い出といえば鳴子での国体合宿です。「若い力と感激にもえよ若人胸をはれ」と参加者全員で合唱した時に厳しい練習の成果が実るよう心から願えました。心技体の総括がそこにあつたと思います。技術面では忍者のように音なく動くフットワークです。力まず自然に動けるようになる重要性を身につけるまで時間を要しましたが力をぬくに至る指標を与えてくれました。又、人間的には教養とは紳士であることをおそわつたと思っております。心にいつぱい滋養をいただいたおつきあいをさせていただきます。きわめつけは世界に通用するにはパワーとスピードのある選手が望まれるということでした。夢と希望をもって

前進する勇気がめばえたことは言うまでもありません。
心の持ちよう、ありようで成長する若い力を指導して
いただいたと感謝しております。
心豊かな青春や人生の基礎をこれからの方々にもおし
え続けて行っていただきたいと思います。フェンシング
は心の強さも磨いてくれた宝です。

参考文献

- 報知新聞、夕刊毎日、スポーツ毎日
日刊スポーツ、スポーツ日本
福島民友、夕刊東北新聞
宮城県フェンシング協会30年誌（昭和55年11月）
東北フェンシング連盟、創立20周年記念誌
（昭和57年8月）
第3回、日韓親善フェスティバル大会報告書
（平成4年10月）
日本地名大辞典（角川書店）
20世紀全記録（講談社）



あとがき

かえりみますと、私が中嶋さんに最初にお目にかかったのは、昭和42年、一関市で開かれた、第5回東北フェンシング選手権大会の時だったと思います。山形県でもフェンシング協会がようやく創立した時であり、何かとご相談申し上げ、ご指導を頂きました。当時の私は、山形東高フェンシング部と、県協会の事務局を担当しておりましたので、中嶋さんとは、東北大会や役員会等でお会いする機会も多く、自然に親しくおつき合いをさせて頂きました。東北フェンシング連盟創立20周年記念に際し、連盟20年史を出版しようという事になり、中嶋さん宅を訪問した事がございました。その時、学生の頃から几帳面に集めてこられた大会プログラム、成績、新聞雑誌の切抜き等が、何冊かのスクラップブックに張りつけられ、又、写真も、戦後のあの時代によくぞこれだけ撮ったものだと驚くほど、主な大会、合宿、納会、メンバーの写真等をきちつとアルバムに整理されておりました。連盟史の資料を頂いたあとに、この資料をそのまま眠らせておくのは惜しい、是非出版してもらいたいものだと申し上げた事がありました。その時はそれで終ったのでありますが、何年か経って、中嶋さんが「自分史を書きたいと思っているのだが、今の私の健康状態と仕事以外に執筆を始めるという事は出来かねる、何とか手伝って欲しい」とのお話がありました。私も中嶋さんのお手伝いが出来ればと思っていたものですから軽くお引受けをしたのですが、いざ始めてみると新聞や雑誌の活字が小さく不鮮明、分散している資料の関連性、見方による違いが異なる結果の記されてある資料のあつかい等、資料の取捨選択、又なかには、プログラムの文字もガリ版刷りのため不鮮明であったり、拡大コピーをして、ルーペで判読して、すすめて来たのですが予想以上の時間がかかってしまいました。又、私が隣家の火災で、有毒ガスを吸い込み、正常復帰に長期間を要し

たり、二人乗り大型バイクに後方から追突され転倒する交通事故、また駅の階段で右膝靭帯損傷という怪我と、思いもかけない事故続きのため、仕事が延び延びとなってしまいました。中嶋さんには大変ご迷惑をおかけしてしまいました。時は流れてしまいました。中嶋さんは、昨年より大変お目出度い事が重なりました事は、皆様ご存知の通りであります。そこで私も本書の上梓には、この期を逃したらないと思いい、一切の仕事を排し、「私のフェンシング人生、中嶋英一」の編集と執筆に精魂を注いで参りました。

中嶋さんを語るには、本書に収められたものだけでは不十分でございます。目に触れるものとしての賞状、トロフィー、楯、メダル、感謝状、記録等々、数多くの資料が残っております。又、このほかに私信や友人、知人、関係者のお言葉まで取材して書き加えるという事になりますと、今の私の力では到底不可能であります。ご勘弁頂くほかにございません。

最後になりますが、中嶋さんの大切に保管されて来た資料の数々を、何時の日か、関係の皆様や一般の方々に公開される日の近からん事を、担当した者として切に希うものであります。

(楯 昭 一)



私のフェンシング人生

平成十三年八月 発行

発行 中嶋 英一

宮城県栗原郡若柳町新町二八

〇二二八―三二―二〇八八

印刷 豊田太印刷所

山形県山形市立谷川二丁目四八五一〇